幼年期―郷原直太の場合・其の壱　じっけん（後篇）

中村太郎

【十】

《直蔵は天界から放逐されて来た堕天使だ。流謫の身となった原因は彼の素行の悪さにあった。いっしょに神様にお仕えしている同僚の品行方正な天使たちを困惑させ、とくに身持ちの堅い天女たちを赤面させる類の粗野な悪戯ばかりしていた。それがついに神様のお耳に達し、天界追放の憂き目に遭ったのだった。

神様は白髭をたくわえゴツゴツ骨張った爺様で、渋紙色のお顔にちょっと悲しげな表情を浮かべておっしゃった。「俗界への追放刑に処すッ。直蔵、もう悪か事ぁしちゃならんぞ。毎日善行に励みょったら、ひょくっとこン天界に呼び戻してやるけん、がまだして（頑張って）善徳ば積みんしゃい――」

直蔵は初めて泣いた。悪気は無いのについ善からぬ方向へと逸脱し、誰かを困らせ傷つけ泣かせてしまう自分が、つくづく情けなかったのだ。

天界きっての悪童とはいえ頑是ない幼児姿の直蔵がしくしく泣くのをご覧になると、神様も不憫だとご慈悲の心を動かされ、「こンとびぐち丸ば、おまえにやろだい――」お庭の隅に転がしてあった舟形の舳先に当たる部分が反り返り気味で尖った鋼鉄の塊を、杖の先で指し示しておっしゃった。多少ともその由来を知る天使や天女たちが、おオ何と畏れ多く勿体ないことだろうと恐懼していると、無知蒙昧も甚だしい直蔵と来たら、何と、「うんにゃ、要らんです」にべもなく断った。「こげな鉄の塊、重とうして足手まといになっだけですけん、こン身一つで良か――」それを聞いた同僚たちは、今度という今度こそ決定的に神様の逆鱗に触れて百雷落ち、直蔵の小っちゃな躰など破裂し千々に砕け散ってしまうのではと、おっかなびっくり見まもっていた。

ところが神様は、その骨張ったお躰を揺すりあげ揺すりあげカラカラカラ…といかにも可笑しげにお笑いになると、幾分自棄になっている直蔵をお諭しになるようにおっしゃった。

「俺ィがこりぃば持って行けちいいよっとは、なんも重荷ば背負わしておまえば苦しめようっちゅう意地悪な魂胆からじゃなかぞ。いくら元気者のおまえでん、徒手空拳じゃ出来っ事も高が知れとろけん、持たすっとぞ。嘘ちおもうなら持ち上げてみれ――」

そこで直蔵が試してみると軽々と持ち上がったばかりか、それに触れている間は尋常ならざる力が湧いてきて躰の隅々

まで漲りわたるのが実感された。直蔵が驚いていると、
「どげんか、得心の行ったか、直蔵？　そりぃはな、昔、鬼神と巨人の合いの子ちゅうて怪力無双の太ぉーか化け物の、不逞極まる事に掠奪ば為ょうでつ天界まで荒らしに来たとき、其ン奴が持って来た得物やった。とびぐちちゅうても厚みの普通ンとより二三倍はあるごたる特注品で、そン木のトゲトゲのところにゃ木の柄の挿げてあったが、俺ィがボキッちへし折ってやったけん今は頭ンとこだけ残っとる。直蔵、トゲトゲばわがで（自分で）平らかに為っついでに錆落としもすっと、乗ってさるくとにも良かろたい――」
　直蔵はそのとびぐち丸とやらの来歴も含めすっかり気に入って、「はいッ、そんなら行ったっ来っです（行って来ます）！」元気いっぱいの返事をした。そんな頬にはち切れんばかりの艶の戻った直蔵を前に、神様は改めてお命じになった。
「よぉし、そんなら今すぐ俗界さん下って、存分に力ば発揮して来んしゃあ～い！」》

《街ぢゅうどこへ行っても掘割に出逢うのが特徴の、小さな城下町――。
　その日、リカちゃんは堀端のお散歩を優雅に愉しんでいた。薄桃色のブラウスと赤いギンガムチェックのミニスカートが、水面に映った空の青と岸辺に揺れる柳の緑に美しく照りはえ、彼女の華やかさを際立たせている。鄙びた風景の中を、いかにも都会的で垢抜けた雰囲気のおしゃれを身にまとった極めつきの美少女がそぞろ歩く様は、名画を想わせた。当然、リカちゃんがただ歩いているだけでも大いに目立った。たまさか往き逢っただけで見惚れるあまり目が眩み、岸から足を踏み外して掘割へ、どぼんッ。そんな事だって珍しくないほど、まるで逢う人逢う人を幻惑しに現れた美の妖精みたようだ。
　そんな時のリカちゃんはつんッと澄まし返って、お澄まし屋の典型のように素っ気ない。だが、自ずと人目を惹かずには措かぬ己が魅力については、充分すぎるくらい自覚していた。この人並外れたナルシストは、我が身にあつまる羨望と憧憬と嫉妬が綯い交ぜとなったまなざしに自己愛を刺激されては、水鏡に映る我が容姿にうっとりと見惚れるのだった。
　そんな彼女だからちやほやされ慣れた人の常で滅法界気位が高かった。世の男どもは鼻の下をだらしなくのばし切って、折あらばお近づきに、あわよくばわりない仲になりたい下心から、エスコート役を競って買って出た。だが彼らの気障な口説き文句など、岸辺に植わった柳に風と受け流しながら、おもうのだ。
　――なんの、安売りしてたまるもんね！　どうせ付き合うとなら一流の、うんにゃ超一流の相手じゃなからな意味ゃ無か。超豪勢か玉の輿にどん乗らな、この世に生まれて来た甲斐の無か！
　ところが、今日はまたどういう風の吹きまわしか、いつもの見るからに不粋極まるボディーガードたちとは違って一風

変わった、珍奇な随伴者に同行を許していた。その随伴者こそ誰あろう、堕天使の直蔵、人呼んで、
――キューピーしゃん。
俗界へと放逐され来た直蔵は、神様から拝領したとびぐち丸一つ道連れに流浪の旅をするうち、この掘割だらけの城下町に辿り着いた。神様がおっしゃったように、その舟形をした鋼鉄の塊の尖った方を前にして跨り、両足で地面を掻くように、ぺたーん、ぺたーん、ぺたーん……と蹴ってやる。すると、エンジンもタイヤも付いてないのが不思議なくらい、すいッすいッすいッ……と軽やかに進む。たまには、ずだだーんッ、ずだだーんッ、ずだだぁ～んッ……と地響きするくらい力強く地面を蹴りつけて漕いでやる。すると、見る人を「ぎょッ！」とさせるくらい猛烈な馬力で加速し疾駆する。そうして旅するうち辿り着いたのが、その街だった。
――やけに掘割のううか（多い）とこやねえ……。
暫し堀端で憩っていると、若い女のせっぱつまったような甲高い悲鳴と、男どもの卑猥な感じのする罵声とが耳に飛び込んで来た。行ってみると、誰知らぬ者とて無い清純派美少女アイドル・リカちゃんを土地者らしき愚連隊が寄ってたかって嬲りものにしている様子。その与太者どもは、ゴリラに似たガッチリ体形の、だが妙にぎこちない動き方をする戦闘用ロボットに率いられており、配下は片耳が千切れ片眼は取れて腹からは中綿が覗く大きな熊など、躰のどこかしらに傷を負った者たちからなる集団だった。そんな世を拗ねて身を持ち崩したような連中がリカちゃんを取り囲んで、音痴だの大根役者だのと罵声を浴びせかけ、スカートめくりみたいな厭がらせをしている様子だった。
直蔵自身もまだ天界に居るときには、天女の羽衣の裾めくりなどさんざん悪さをして厭がられた札付きの悪童だった。だが今は、
――その罪滅ぼしに善徳を積み重ねること。
その使命を帯びて俗界巡りする道すがら、見て見ぬフリで素通りすることなど出来ない。
「コラ何ば為ょっとかね？　ごんしゃんの厭がりより召すじゃっかん（お嬢さんが厭がっておいでじゃないか）。止めんと、くらすっぞ（拳骨くらわすぞ）！――」
愚連隊の連中は一瞬ドキリとして振り返ったが、幼児然とした素っ裸の直蔵をみると、「なんかぬしゃ（何だおまえ）？　まだやや子（赤ん坊）んごたっとの、乳母車ばやっと卒業したくれぇの餓鬼の乗るおもちゃン車にどん跨って……。生意気いいよっとジゴに為ゅっぞ（はらわたが出るくらい酷い目に遭わすぞ）！――」侮り切って威嚇して来た。
直蔵は、見かけは赤ん坊っぽい幼児だが、「ふんッ、相手ばみて物ばいえ。あんしゃんたちゃ（おにいさん方は）、おなごばいじめてどげん為ッ？　恥ずかしゅうはなかとかね、ケ腐れどめが（腐ったような連中どもめが）！」威嚇に動じるどころか鼻先で嘲笑うと、愚連隊の面々を改めて観察した。やっぱり、どれもこれもどこかしらに修復不可能な損傷を抱

えた半壊状態で、五体満足な者はいなさそうだった。
　さらに、その愚連隊とはまた別に、あたかも伝説上の妖怪ヌエ（鵺）をも髣髴とさせるくらい、ちぐはぐで奇妙奇天烈な姿形の三匹もいた。彼らは困惑した様子で、遊歩道の脇の方で互いの陰に隠れ合うようにしながらおずおずと、事態を遠巻きに傍観していた。そんな三匹に対しても、リカちゃんはもう最前からずっと、
「あんたたちゃあたしのボディーガードやろもん……、早よ此奴っどめばやっつくるか追っ払うか、どげんか為ぇんね！」いかにも苛立たしげに叱咤激励の、矢の催促をしているのだが、笛吹けど踊らず。リカちゃんのボディーガードだという彼らは相手が怖いのか、他になにか理由でもあるのか尻込みして、課された役目を果たそうと動く様子も無い。
　だから愚連隊の面々はそんな三匹を歯牙にもかけず、直蔵にはなおさら侮った態度で、「何かこんチビは、スッポンポンの素っ裸で、おまるにどん跨ったごつしてから！」「まだうんこしっこばまりかぶりよるとやろだい。ナアまりかぶり小僧！」「おまる乗りのまりかぶり小僧げなぁ～、はぁ可笑しさァ、こら良か――」愚弄の限りを尽くした。そうした罵詈雑言の一つ一つが、直蔵にはけっしていうべからざる禁句であり、また直蔵の荒ぶる闘魂を刺激し、自ら災厄を招くこととなる呪文に等しいとも知らずに。
　直蔵は跨ったままのとびぐち丸を軽く撫で、「いっちょやるか……」と囁きかけるが早いか地べたをひと蹴り、為事にかかった。先っちょの尖った所を自分の何倍もある大きな熊の腹の破れ目に引っ掛けるや、軽々と撥ね上げて高々と宙を舞わせ、掘割の中へ放り込んでやった。それをみて忽ち浮足だった連中も、とびぐち丸の尖端から逃れることは不可能だった。引っ掛けられて「ぎゃッ！」、撥ね上げられて「うぇうぇうぇッ！」、そして後は、どぼんッ、どぼんッ、どぼんッ……と次から次に掘割の中で水飛沫をあげた。
　それをみて胆を潰した愚連隊の頭目らしきゴリラ型戦闘用ロボットが、「こン借りは必ず返すけん忘るんな！」と陳腐な捨て台詞を残し、長い両腕とその半分くらいの長さの両足とを、ぎっちら、ぎっちら、ぎっちら……前後交互に動かし這う這うの体で遁走にかかると、配下の者たちも兄貴兄貴……と後を追って逃げ去った――。
　直蔵は深追いせず、「ごんしゃん（お嬢さん）、怪我は無かったかんも？」とリカちゃんに声をかけた。
「ええ、おかげさまで！」云々と謝辞を述べるリカちゃん。
「そんなら良かった、さいなら」と去って行こうとする直蔵。
「うんにゃ、待って……、ちょっと待ってはいよ（お待ちになって。「はいよ」は拝領が語源といわれる）！」リカちゃんは直蔵の水際立った太刀廻りの鮮やかさに目をつけて頼み込んだ。「どなたか存じ上げまっしぇんばってん、ぜし（是非）あたしの用心棒ばしてはいよ！」
　放浪生活で一度自由に親しんだ身の直蔵にとって、リカちゃんの頼みは面倒くさくて気がすすまなかったが、例の俗世

で善徳を積むべしという使命ゆえに、「そげんいい召とすなら為様ン無かたんも――」しぶしぶ引き受けた。
一方、役立たずに終わった三匹のヌエもどきの化け物たちは職務怠慢の責任を問われ、その場でお役御免をいい渡された。》

《直蔵は持ち前の精力を持て余して暴走しがちな野性児だが、虚飾とは無縁に生きる質実剛健の実践者だ。そんな彼なればこそいっそう、リカちゃんの己が美貌を誇るがゆえの強烈な自己愛や、常に他者の輪の中心に身を置こうとする過剰な自己顕示欲、またそれらを隠そうともせぬ恥じらいの無さや、可憐な仮面の下に潜む擦れっ枯らしの本性等々、一度鼻につきだすと気になってしょうがなかった。だから、リカちゃんがどんなに眉目秀麗な、マスコミが大々的に企画した「全国小町ちゃんコンテスト」でダントツ一位の「小町ちゃん大賞」を獲得した折り紙付きの美少女でも、醒めた眼でみていた。ついでにいうと、この世のものとはおもえぬ天女の美貌ばかり見飽きて、美女に食傷気味だったことの作用も多少はあったにちがいない。それでも用心棒役を引き受け随伴者となった理由の一半は、
――リカちゃんのご機嫌ばいっぺん損ぬっと、後でどげなせからしか（面倒な、厄介な）厭がらしぇばされんとも限らんめえやァ……。
今や国民的美少女アイドルとしての地位を確立して映画にテレビにと引っ張りだこで、交際範囲も各界に及ぶリカちゃんに、陰で、
「天使のキューピーのちゅうてパンツいっちょ穿かんなスッポンポンで居っとは、ほんなこつぁ（実は）露出狂やけんばい。天界でもちんこ丸出しで天女の尻ばかし追い駆け廻しょったげなたい。そげなニヤガリ者（不埒者）の厭らしか色魔やけん、いっちゃん（一番）偉か神様に天界から追い出されたとげなア――」この件に関してだけならまだしも、ほんのすこしだけだが身に覚えが無くもない。だが、「あンとびぐち丸ちゅうて妙なか乗り物な、実は正体がおまるち知っとんね？　夜でん昼でん未ぁーだオモラシの止まんけん、おまるに腰掛けて何処さんでん出てさるきょっとよ（出歩いてるのよ）。うんこでんしっこでん為ぅごんなったら（便意・尿意を催したら）いつでん、ぶりぶりぃ～ッ、の、しゃーッ、ちゅうて、何時でんまる（放る）とげなよ。良う出来とっでしょうが、のもォ（ねえェ）――」こんなデマなんか触れ廻られた日には、堪ったもんじゃない！　そんな風評被害に悩まされるくらいならお散歩に付き合わされるくらいお安い御用だと、自己説得に努めて引き受けた。
すっきりと晴れ渡った空の下、水鏡に浮かんだ陽光がキラキラと照り返す掘割と、そよ風が柳の枝葉をくすぐって揺らすその岸辺の光景……。実に清々しい眺望が展開する堀端の遊歩道に、ゆったりと歩みを進めてゆく、二人。お喋りしているのは専らリカちゃんで、その半分は自慢話と、あと半分

は誰かの悪口が占める。それに気のなさそうな相槌を打つ、堕天使の直蔵。野性児の割に辛抱強いのは、俗界の片隅に身を置くようになってすこしは辛抱する術も覚えたのだ。それにしてもリカちゃんの話はつまらなくて、生返事の合間にあくびを噛み殺すのにも骨が折れるようになってきた頃、異変が生じた。

掘割の水面を突き破って、形といい光り具合といい出刃包丁そっくりの物体が突然、にょきッとそそり立った。その出刃包丁は実は人喰い鮫然とした顔の鼻先に当たる部分で、その下の胴体以下全部ザリガニが巨大化した躰とつながっていた。その見るからにグロテスクな化け物が、掘割の岸辺に造られた汲水（くみず、水汲み場）の石段を、ポキポキした感じの脚を器用に使って這い登って来た。

直蔵が、なんか見憶えのある奴だな、そうだ、俺の前にリカちゃんのボディーガードをしていた三匹のうちの一匹かなどとおもっていると、リカちゃんは、ちッと舌打ちして、「ちょっとアンタ……、なんか用ね？　用のあっとなら早よいわんね。無かとなら早よ消え失せて！」そんなけんもほろろの反応に、相手は怯んだのか、鋭い歯が並んだ恐ろしげな口をモゴつかせているところへ、再び押ッ被せるように、「用が無かとなら早よ消え失せんねやん！　もうあんたどんな、あたしン用心棒でんボディーガードでんなかとやけんがら。目障りたい！」ヒステリックな口調でキャンキャンいっている。

だが今度は、遊歩道を挟んで掘割とは反対側にある田んぼの隅の竹薮がガサゴソいって、そこからも化け物が姿を現した。そいつはそいつで、天辺に黄色味がかった角が一本生えた黒くて丸くて大きなサンショウウオみたいな、異様にぼってりとした感じの頭部に、横一文字の裂け目のような大きな口が開いていて、その両脇には小さな丸い目が、ぎょろッ。そのくせ頸から下はオランウータンのように毛足の長い赤茶けた体毛がふさふさふさ……。

また、その時俄かに陽が翳ったかとおもったら、上空から何かが急接近して来て頭上を掠め、ばさッばさッばさッと羽音を立て降り立った。そいつは腕の代わりに鷲のような大きな翼が肩から伸びた、頭部は絵巻物に描かれた烏天狗で、頸から下の胴体にかけてはまるで狼男、そして両翼の先端には鋭い鉤爪のある鷲か鷹のような大きな手が付いていて……。

三者三様の現れ方で出現した彼らが揃ったところで改めて見てみると、躰の各部位どうしがそれらの間での統一を欠くこと甚だしいがゆえにちぐはぐな点では共通する、どれ一匹取っても奇妙奇天烈で不気味で醜悪な外貌を持つ、化け物たちなのだった。そんな彼らに対して、リカちゃんは、「わいたァ～、ヌエもどきの化け物三兄弟のお揃いでから、仲の良かつぁ結構な事ばってん、今ごろ何の用事じゃろか？　こっちゃもう何ぁ～んも用事やら無かとばってんがら……」

――ヌエもどきの化け物三兄弟。

リカちゃんからもそんなふうに呼ばれたうちの、最初に水

中から現れた奴が、人喰い鮫風の口をぱくぱく開閉させて、「ごんしゃん、リカお嬢ちゃま、どうぞ俺ィどん三兄弟ばもういっぺん雇い直して、用心棒のボディーガードばさせてはいよ、こンとおり頼んますけん！」出刃包丁そっくりの物騒な鼻面をペコペコさせていうとおり、再雇用を懇願しに現れたのだった。「そン仕事ば失くすちゅう事は、俺ィどんとっちゃただ失業すっちゅうだけン事じゃなか。俺ィどんがいったい何者か、そン自己同一しぇい、アイデンちちいっちゅうとも、いっしょに無うなってしもた！　情けなか事に、自分が何者か、まぁたわからんごつなってしもたとですたい！」失業に伴うアイデンティティー、自己同一性の喪失……、その寄る辺無さから来る困惑や悲哀を切々と訴えかけた。

　すると、竹薮から現れたオオサンショウウオとオランウータンとの合いの子みたいなのも、滑空して現れた烏天狗と狼男と猛禽類との雑種みたいなのも大いに首肯いて、「こン前迄の俺ィどんな、どこさん行ったっちゃ『かの有名な清純派美少女アイドル・リカちゃんの用心棒』ちゅう事っで通っとった。ばってん、そこに居らすキューピーしゃんに、こげんいうちゃあ何ばってん……」といいにくそうにしながら、「面目玉ば潰しゃれたうえ仕事まで奪われっちもうて……」と、直蔵にとっては実際人聞きの悪いような言い方で、「……そン仕事ばクビになってからこっち、俺ィどんちゃいったい何者か、わがでん（自分でも）わからんごつなってしもた。そしたら、『いろいろゴチャ混じぇの、得体の知れん正体不明の胡散臭か、まるでヌエんごたる奴っどん』ちゅうて、陰口は叩かるっわ、後ろ指はささるっわ、誰もまともに相手しちゃくれん。社会的信用っちゅうやつもすっかり、いっぺんぺんに無うなってしもた。もうどげんしたら良かつか、術無うして、とにかく……、とにかく辛かとです！」

　こんなふうに三匹が口を揃えて自分たちの苦衷と悲哀とを切々と吐露した。》

　ヌエ（鵺）もどきの化け物三兄弟。彼らがいったいいかなる経緯でそう呼ばれる存在となったのかというと、それは直太の、

　――じっけん。

　すなわち、おもちゃの強度と耐久性を試すような彼独特のやり方で行われる独り遊びと、それに付随して行われた、

　――かいぞう。

　要するに、すべてが直太の行為に起因しているのだった。

　直太の家の向かい側は、彼の同級生でお寺のじょっちゃんこと小宮山浄海が居る延応寺という真宗のお寺だが、そこの山門脇に松島工務店という小さな水道工事屋があって、そこの次男坊で和則という名の三学年上の男児が、人懐っこくて気の好い、直太の兄貴分だった。蝉捕りやザリガニ釣りに連れて行ってくれるのも彼だった。

　ある日、その和則君が古びた塩ビ製模型玩具の悪役怪獣ばかり四五体ほども持ってやって来ていうには、「俺ィももう

四年生やろがァ。こげな怪獣のおもちゃてろんな、もう要らん。直ちゃんにじぇんぶやったい――」突然何かに目覚めたかのように一方的に宣言すると、置いて帰って行った。直太は、折角くれるという物は貰っとくことにして、さっそく「じっけん」を始めた。

例のごとく「しゅわわわわぁ～ん、どずごふッ、どずごふッ、どずごふッ、でゅわわわわぁ～ん、がごぴっしゃあぁーーーんッ……！」などと、直太一流の珍妙なオノマトペを盛りだくさんで口走りながら、祖母久代いうところの「おろ善かつにどん（質の悪い物の怪にでも）取っ憑かれたごつ」夢中になり、ふだんどおり手加減・力加減一切無しでガッシャンガッシャンぶつかり合わせ、肉弾相打つ激闘を演じさせて遊んだ。すると、すでにだいぶガタが来てポンコツ化も進んでいたらしく、それらの強度と耐久性の限界を超えてしまった。肩から腕が、ぽろッ、と外れたかとおもうと、股から脚が、ぽろッ、と抜け落ち、そのうち今度は首までが……となりゆく始末。一度外れるとそれが癖になって、嵌め込み直してもどうせまたすぐに外れてしまう。その点、直太が学校帰りに拾って来た、

――とびぐちの頭。

これなど元々が酷使にも耐え得る実用品だが、そんな直太の玩弄品の中にあっては稀有の存在、例外中の例外を除けば、直太が手にして遊ぶからには早晩壊れゆく運命を辿るのだった。ましてや疾うに焼きがまわった塩ビ製模型玩具など……。

直太は、それらの悪役怪獣が彼自身の手で解体されてゆく、各部位へと分解してゆく様を、いつもの果敢なく切ない気分で眺めていた。だがそのうち、むしゃくしゃッ、と憤ろしいような破壊の衝動に駆られ、

――どうせバラバラになっとなら……！

軽い狂気にでも取り憑かれたように、解体作業に熱中した。そしてとうとう、元は何ラとか何ゴンとか何々星人とか、各自が個体としてその外見にふさわしい名前を持つ怪獣たちの躰を、首・胴体・腕・脚・尻尾といった各部位にまで解体可能な限りバラバラに分解してしまった。そうして解体された怪獣たちの残骸を眺め、部品を手に取ったついでに鼻に押し当て、いかにも化学物質といった感じの匂いを嗅いでいると、一昨年の晩秋に身罷った祖父文蔵が、

「うちの直太はおもちゃばまぁ～たそげんバラバラに為かしてェ！」また例の茶化すような調子で囁きかけて来た。「あぁ～あ、うちの直太は相変わらず、怪獣でん何でん手当たり次第に壊しょるばいねェ。あらぁ～ら、直太にゃ呆れた、じいちゃんな魂消ったァ！」

直太は文蔵の存在を間近く感じながら、

「じいちゃーん、そげんいうばってんねえ、直太が壊そうでせんでちゃすぐ壊るっとばい！」と口ごたえ。もとより姿は見えぬが、その気配、煙草のヤニとポマードの香料の匂いに耳に馴染んだ声で、すぐに文蔵だとわかる。幽霊は怖いが、文蔵だとちっとも怖くない。

「そげんバラバラにしてしもてから……、自分で元どおり直し切るなら良かばってんがら、直し切らんじゃろうが、直太はァ――」

「うんにゃ、直太もう一年生やけん直し切るもん！」そう応じた手前、なんとか元どおりにと組み立て直し始めたが、ふと湧き起こった出来心。試しに、わざとデタラメに別々の怪獣の部位どうしを挿げ替えて嵌め込んでみると、これがおもったより斬新な感じでおもしろい。すっかり興が乗って、わざと取り違えて嵌め込んでみるうちに、いよいよそのおもしろさにはまったのだった。

文蔵が途中で、「おろッ、おまえ、そりゃ違うとりゃせんかね？」などといっても、直太は、「うんにゃ、こりゃで良かとォ！」聞く耳を持たない。「じいちゃんな黙って、どげんかつの出来っか見とってん……」自分がおもしろきゃ問題無し。直太は、その怪獣たちの躰をデタラメに継ぎ接ぎするパッチワーク的作業に没頭した。すると、その統一感が損なわれて組み上がってきたときのチグハグ感が、元の悪役怪獣以上に不気味でグロテスクで滑稽なのだった。その作業を直太が最近テレビのヒーローもので憶えたばかりの言葉でいい表すと、

――かいぞう（改造）。

「じいちゃん、直太ねえ、こんげんやって、かいぞう為ょっと！　こげん元と違うごつ為っとば、かいぞうちゅうとばい。そうやろ、じいちゃん？……」自分の手による「かいぞう」を経て生まれ変わった怪獣たちの、元の悪役怪獣より魅力的と感じられる姿に見惚れるうち、「ヌエんごたッ（まるでヌエみたいだ）！　ねえねえ、じいちゃん、ヌエんごたろ？　だけん、ヌエもどきで良か！」すでに去ったのか文蔵からの返事は無かったが、直太は満足していよいよ意気軒高なのだった。

「鵺（ヌエ）」と呼ばれる伝説上の怪物が出て来る物語は、高校で国語教師をしている父誠人から話に聴いて知っていた。――源平の昔、夜な夜な宮中に出没して時の帝を悩ませ参らせた妖怪を勇猛な武士の大将が家来たちと退治してみると、息絶えた魔物の正体は頭が猿で胴体は狸、四肢は虎で尾は蛇という、幾種類もの動物の躰の部位を寄せ集めた化け物だったそうな。一方、「もどき」はというと、テレビのヒーローものに登場する悪役で、全員がおなじ姿の十把一絡げでゾロゾロ出て来てはヒーローに蹴散らかされる、極めて没個性的な下っ端の彼らの総称が、人間もどき。その彼らの存在態が醸す雰囲気から、「もどき」が何かとは似て非なる対象を指し示す言葉であることは、幼い直太にも理解できた。

だから、直太の「じっけん」とそこから派生した「かいぞう」を経て再生した彼らは、いろんな怪獣が混ぜこぜになった正体不明のヌエみたいな化け物ということで、

――ヌエもどき。

《リカちゃんの心には、彼らヌエもどきの化け物三兄弟の懐

悩など、微塵も、それこそ寸毫たりとも響かぬ。それどころか、彼女には耳慣れぬ言葉や概念まで引っ張り出して来て徒に深刻ぶるような様が、ただ気障ったらしくて笑止千万でしかない。当然、同情も共感も憐憫も一切湧かぬ。「あんたどんな、そげなげさっか（下策。見苦しい、醜い）、気色ン悪ぁ〜るかなり（姿）ばしとって、何ばそげなツンのぼした（のぼせた、調子に乗った）ごたる事ばいいより召すとじゃいろ？　意味ゃわからんばってんがら、はァ可笑っさ！」さんざんな冷笑を浴びせ、さらには、「だいたいがたい、あたしンごたる『小町ちゃん大賞』ば獲った『清純派美少女アイドル』がくさい、あんたどんがごたる気色ン悪ぁ〜るかヌエもどきの化け物てろんばボディーガードちゅうて連れっさるきょったら、イメージダウンになろだい。しかも、見かけのおどろおどろしかっちゅうだけン事で、こン前でんイザっちゅう時ゃ頼りにならんやったやんね！　そげなつぁ早よクビにして代わりに、頼りになる腕利きば雇わやこて（雇わなくっちゃ）！　その点じゃ、こン直蔵ちゃんちゅうキューピーしゃんな、可愛うして腕も頼りになるけん、あたしゃ雇うて満足たい。これ以上付きまとうて邪魔しょっと、直蔵ちゃんにギッタギタにやっつけられたっちゃ知らんばい！――」リカちゃんはさんざん悪態をついた挙句に、復職を望む彼らの願いを素気なく一蹴した。

しかし化け物たちは、これだけにべもなく断られてなお、未だ諦めがつかぬ様子で、

「ばってん、そんならせめて……」自分たちも散歩に同行することだけでも許可して欲しいと、卑屈なくらい遜って懇願した。「……ねえ、良かでっしょうもん、頼んますばい、ごんしゃん、リカお嬢ちゃま！」

が、一度いいだしたら聞かぬのがリカちゃんで、「そんならこン前はあたしがお散歩中に、おもちゃ箱ン中ぇ棲みついとるウゾームゾー（有象無象）のポンコツ・ガラクタどもに絡まれて困っとった時ゃ、なんで助けてくれんやったァ？」と、彼らの本質に関わる痛い所を突いた。

改めてそう問い質されると、化け物たちは気まずそうに押し黙り、互いに視線を交わし合う顔に、彼らなりの苦悩がにじんだ。というのも、リカちゃんのいう「おもちゃ箱ン中ぇ棲みついとるウゾームゾーのポンコツ・ガラクタども」もまた彼ら三兄弟とは、直太による「じっけん」の被害者という意味で同病相憐れむ間柄の、つまりはおなじ身の上なのだった。リカちゃんに雇われた用心棒とはいっても、境遇が似たり寄ったりの彼らと一戦交える気にもなれず、手を束ねているうちに、通りがかりの直蔵に手柄ばかりか仕事まで持って行かれたというわけだ。

だが、リカちゃんは彼らの苦衷など理解しようとする気もむろん無く、「さアいうてみろやん、なんでか？」その時の事を想い起こしたせいで彼ら三兄弟への怒りが再燃したらしく、責めたてた。「わがどんがごたる（おまえらのような）役立たずはもう二度とあたしン前にゃ現るんな！」と彼らの

願いを撥ねつけたうえで、「ぎぇ〜ッ、見ぃ苦しか！　改めて見っと、ふた目ちゃ見られんごつ醜か！　そげなげさっ（下策）か面ばしとって、ようそげな厚かましか頼み事ばしに現るっよねェ！　どン面さげて来たやか、ぎぇぎぇぎぇ〜ッ、気色ン悪ぅして厭ばいやん！　しッ、しッ、しッ、早よあっつぁん（あっちへ）行けじゃん、こン化け物どもが！」一度火が点くと、そのヒステリックな自身の声にどんどんと焚きつけられたようになっていって、「顔でん姿形でん誰が見たっちゃ気色ン悪ぅして、眼ン球の腐るっごつ醜かけんがら、生きとっだけでん目障り千万な、早よ死んだがマシんごたる、出来損ないの化け物どもがァ！――」

直蔵は、彼らなりの深刻な事情を抱えているらしい化け物たちが、リカちゃんにクソミソに罵倒されてもしょぼくれるだけの姿をみて、気の毒で堪らなくなった。彼らは、幾種類もの怪獣の躰の部位の寄せ集めから成る不統一性ゆえのアイデンティティー（自己同一性）喪失の危機に瀕し、「清純派美少女アイドル・リカちゃんの用心棒」という社会的肩書を生存上必要不可欠とまでおもいつめていたのだ。だからその肩書を失った――間接的にだが直蔵に横取りされた――途端、その宿命的なアイデンティティー喪失の危機にまたぞろ直面せざるを得なくなったというわけだ。「リカちゃんやん、こンしと（人）たちが事ばそげん酷ぅいわんでん良かろうもん。なんも好きこのんでこげな、何じゃいろカンじゃいろ混じぇくったごたる姿になっとらすわけじゃなか。そりぃでこげん困っとらっしゃるとに悪ぅいうちゃ、気の毒かばい」彼らを執りなしてやろうとした。「俺ィもこン俗界ばぐるっと巡る間に出来っしこ（できるだけ）善か事ばして徳ば積まないかんとやけん、そげんいつまっでん（そう迄も）一と所にばかしも居られんとばい。俺ィが代わりに、こンしとたちばまた元の用心棒に戻してやったら良かやんね？　ほら、水ン中からバッシャーンちゅうて出て来たつもおれば、空ばヒューバサバサバサッちゅうて飛んで来たつもおって、あとン一匹ゃ隠れとった薮ン中からダダダダッち駄々走りして現れなはったろが。陸・海・空の三つが揃うて、まるで自衛隊ンごたるやっかん」

それを聞いてリカちゃんは、

「へえエ、いま何ちゅうたァ、ネエ何ちゅうたとねて？　はア、魂消った、あーら、魂消った……！」大根役者らしくかにも芝居がかった大げさな演技も交え、ひきつった気味の悪い薄笑いを浮かべながら、妙にひねくれた言い方で絡んで来た。「わかったたい！　こないだあたしが、おもちゃ箱ン中ぇ棲みついとるウゾームゾーのポンコツ・ガラクタどもに絡まれて困っとったとき、助けてくれたつも只ン気まぐれやったばいね？　そりぃか、『善か事ばして徳ば積まないかんち、天界の神様におおせつこうたけん、めんど臭かが為様ン無かたいッ』ち、やっつけ為事で宿題ば片付くっごつ助けてくれて、厭々ながらボディーガードまで引き受けてくれたとばいね！　助けてもろていうとも何ばってん、そんなら偽善

者と何も変わらんやんね？　違うちゅうとなら、こげんしてお散歩にも付き合うてくれとるが、何でね？　何でねち訊きよるやんね、早よ答えてよ！　何でね……？」

　そのリカちゃんの執拗かつひどくひねくれて、常軌を逸した感じの詰問に、直蔵は答える言葉を持たなかった。本音をいうと、もし断れば、直蔵が年がら年ぢゅう素っ裸でいるのは露出狂だからだとか、とびぐち丸はオモラシが止まぬがゆえのおまるなのだとか、ゴシップ好きのリカちゃんなら直蔵本人が与り知らぬところの陰口で、どんな醜聞のデマだっていい触らしかねぬ。その危惧が必ずしも杞憂でないことは、自慢話の他は全部他人の悪口が占めるお喋りや、相手が化け物とはいえあんまりな言い草が物語っている。だから直蔵が、

――あア、もうウンザリした……、こげな奴のボディーガードやら務まらん！

　そうおもって、ふと周囲を見まわすと、煉瓦を敷き詰めた遊歩道の路面を照らす陽も翳り、見上げる空の色も赤黒っぽい熟柿色にちかづいて、掘割の水面にも夕闇が漂いはじめているのだった。

　また、直蔵がその時になってようやく気づいたのは、周囲からの視線の多さだった。リカちゃんがヒステリックに騒ぎ立てたせいで、何事が起こったのかと怪訝に感じた者たちが物見高くも堀端に出て来て、そこここから耳目をこちらへと向けて来ている様子だった。ざっと見渡しただけでも、両岸に植わった柳の木陰といわず、近くに架かる「だんぺい橋」という名の木造の橋の上やその袂といわず、道の傍らにある田んぼの畦道といわず、さっきヌエもどきのうちの一匹が跳び出して来た竹藪の辺りといわず……、至る所にリカちゃんのいう「おもちゃ箱ン中ぇ棲みついとるウゾームゾーのポンコツ・ガラクタども」の姿がみられ、こちらの様子を窺っている感じが犇々と伝わって来た。しかも、総じて古び、どこかしらに綻びや欠損部のみられる点で、百鬼夜行図の中の器物の妖怪を想わせる彼らは、顔馴染みどうしが三々五々寄り集まって、リカちゃんについてのあれやこれやをヒソヒソとあげつらっているような按配だった。直蔵は居心地の悪さとともに、厭な予感じみた薄気味悪さを覚えはじめた。

　一方、リカちゃんは急にきゃぴきゃぴしだして、これが今の今まで直蔵を詰問責めにし、その前はヌエもどきたちをクソミソに罵倒していたのと同一人物かとおもうほど、誰彼となく八方美人的な笑顔を振りまき、大根役者なりの演技力を遺憾無く発揮しつつあるのだった。直蔵は、彼女のモットー、

――アイドルは注目を浴びてナンボ、注目を浴びている限りは常にアイドルであれ！

　それを実践したのがこの態度なのだろう、とおもった。≫

【十一】

≪清純派美少女アイドル・リカちゃんには、熱狂的なファンと同じくらい、アンチ・ファンと呼ばれる逆説的な意味での一種のファンも大勢ついていた。彼らは、リカちゃんの歌や

芝居といった本業からその他の立ち居振る舞いに至るまで、一々あげつらい悪し様にけなしつけずには済まなかった。いわく、「ちょっと人気が出たけんちゅうて天狗になって生意気かァ！」だとか、「顔形の可愛かけんちゅうて鼻にかけて出しゃばっとこりゃが好かん！」だとか、「目立とう精神のあざとうして見とる方が恥ずかしか！」だとか……。そんなに嫌いならリカちゃんに関する一切を無視黙殺して済ませばよいものを、彼女に対し並々ならぬ執着を示し、微に入り細を穿ってコキ下ろさずには気が済まぬのだった。

　では、当のリカちゃんは彼らをどうおもっているのかというと、

「上にアンチの付いとったっちゃファンはファンじゃろもん。アイドルの芸能人のちゅうたら、とにかく注目されてナンボやろが。どけ（どこに）居っとかもわからんごつ目立たんで、なんの興味も抱かれんな居るとの、そりゃがいっちゃん辛かろたい。そンくれえぐれえなら、たとえ蛇蠍ンごつ嫌われたっちゃまだマシばい――」そう割り切って揺るがぬプロ根性にだけは、直蔵も感服せざるを得なかった。

　リカちゃんのファンとアンチ・ファンが相半ばする点では、彼女のいう「おもちゃ箱ン中ぇ棲みついとるウゾームゾーのポンコツ・ガラクタども」の間でも同様だった。否、むしろその毀誉褒貶の度合はより激烈で、好悪の懸隔は両極端であった。つまり、彼らのうち半分が熱狂的大ファンなら、残り半分は彼女を目の敵とするアンチ・ファンなのだった。

　それでも稀に「リカちゃんてろん好きでも嫌いでもなかし、そもそも興味が湧かん」と中立的立場をとる少数派もいたが、多数派からは「どっちつかずの半端者の煮え切らんとが、そン面見とっだけでんイライラすッ。よう恥ずかしゅうなかね！」などと、まるで厚顔無恥な不徳義漢、背徳者の類に対するような侮蔑にくわえ、おもちゃ箱の隅っこに押しやられる物理的迫害といった理不尽極まる差別的処遇を受けていた。

　そんなおもちゃ箱の中の住民のうちほとんど全員が、直太の「じっけん」による故障や欠損をどこかしらに抱えていて、彼らが時に「どっか壊されとって一人前――」などと強がってみせるのも、欠陥者としてのコンプレックスゆえの表現だった。そうした苛酷な運命に抗う方途として、何らかの意味で突き抜けた存在となることを志向し、その徹底性によって己の欠陥を補完し克服することを自らに課した。その点、リカちゃんは彼らの課題を実践するうえでの格好の素材となった。つまり、

　――リカちゃんをとことん大好きなコアなファンになるか、さもなくば、とことん大嫌いな、それはそれでまたコアなアンチ・ファンになるか。

　そのいずれかを選んで打ち込むことに、己が存在の意義や価値を懸けた。その強迫観念がファンとしての、あるいはアンチ・ファンとしての自らの所属集団内における同類たちとの競争を通して強化されるに及んで、リカちゃんに対する好悪や毀誉褒貶も過激化の一途を辿った。またその傾向ととも

に、二つの集団間での対抗意識も強化され、いまや敵味方に分かれて抗争を繰り拡げるまでに発展していた――。

その互いに反目し合う二つの集団の構成員たちの姿がいつの間にか、夕闇のベールに包まれはじめた掘割の両岸に散見されるようになり、活動を活発化させつつあった。

直蔵とリカちゃんが居る側とは逆の対岸には、リカちゃん親衛隊を自称する者たちが集結しはじめていて、その中心には自他共に許すリカちゃん親衛隊長、虎の覆面を被ったプロレスラーの姿もあった。筋骨隆々の圧倒的な躰つきで群を抜く彼もまた直太の「じっけん」の被害者で、一度外れたら癖になった片腕がとうとう散逸して、隻腕となっていた。だが今日の彼はそこに、直太がもっと幼い頃おしゃぶり代わりにしたついでに周りの布を食い破って駄目にした、かつて仏壇の鈴のばちだった棒を仕込んでいた。そんな彼直属の親衛隊員たちを中核として、周囲にはリカちゃんファンたちが陸続と寄り集まって来ていた。

その様子を対岸から睥睨して気勢を上げているのは、あのゴリラに似てごっつい体形をした戦闘用ロボットだった。彼はかつて、背中に突き出たネジさえ巻いてやれば暫くはひとりでにジーコジーコジーコ……と二足歩行で勇ましく闊歩していたものだ。ところが、直太の「じっけん」で中のゼンマイ仕掛けの機械を壊されて以来、ネジを巻くことすら出来ない。その代わり、短い両脚と地面につくほど長い両腕とを交互に前後させて動き廻る術を体得した。そんな彼はアンチ・ファンからなる集団を束ねる頭目で、腕っ節の強さでは定評があった。

こうして両軍の将どうしがさほど広くもない川幅の掘割を挟んで睨み合い、濃さを増す夕闇の中で暴力沙汰に発展しかねぬ不穏な空気を醸成させつつあった――。≫

≪直蔵たちが今いる場所から目と鼻の先には、

――だんぺい橋。

地元でそう呼ばれる木造の橋が架かっていた。その橋の上からの眺めはなかなかのものだとの定評を得ていた。味噌や醤油の醸造所だという赤煉瓦造りの蔵や、阿形と吽形で一対をなす金剛力士像が守るお寺の山門や、昔の武家屋敷の背戸の築地塀や生垣や菜畑など。それらの景物が色彩の微妙な配合をみせて掘割の水面に映り込み、ぼんやりと眺めているだけで心和むのだそうな――。

だが今はそのだんぺい橋も、上から木の欄干にもたれて景色を愛でるどころではなかった。そこを渡って往き来する者の動きが活発化していたのだ。最初は堀端に出て来てただリカちゃんを眺めてはひそひそ話に興じていた者たちが、ファンなら虎の覆面レスラーが居る側へ、逆にアンチ・ファンならゴリラ型戦闘用ロボットの居る側へと、仲間どうし集結すべく移動して行くのだった。

その誰いうともなく生じて粛々と進行しつつある動きには、さすがのリカちゃんも不穏な匂いを嗅ぎ取ったらしく、

「直蔵ちゃん、なんか知らん、えすぅなか（怖くない）？……」

直蔵も、全裸ゆえ剥き出しの全身の肌が粟立ってくる感覚を体験していたところで、今のこの状況から早めに脱出を試みようと、リカちゃんがとびぐち丸の後ろに乗れるよう前につめてやった。そして途中で振り落としてはまずいので、リカちゃんの躰が直蔵の躰に常に密着するよう後ろから抱きつかせておいて、「そんなら行くばい――」ひと声かけ、地べたを蹴って発進させた。いま居る側にはアンチ・ファンが集結しつつあったので、ファンの陣地が出来つつある対岸へと、だんぺい橋を渡って移動することにしたのだ。「すんまっしぇん、ハイちょっと通してはいよ、ハイハイすんまっしぇん……」直蔵がそう声をかけながら、とびぐち丸の尖端部をこちらへ向けて進んで来るのに橋の上で出逢った者たちは、大抵両脇の欄干際に分かれ道を空けて、通してくれた。だが、ゆっくり渡っていくうち橋の中央部辺りまで来ると、ファンとアンチ・ファンが互いに逆流し合うかたちで擦れ違う際に、リカちゃんをめぐる対抗意識から小競り合いも生じていた。

直蔵たちとおなじく向こう岸へと渡っていくリカちゃんファンたちの間からは、「わいたぁーッ、やっぱし美しさぁ～、可愛さぁ～、好かおなごねぇ～！」リカちゃんを褒めそやし、そんなリカちゃんを後ろから抱きつかせて通る直蔵を、「良かねェ～、リカちゃんにギュッちされて！……」などと羨む声もあがった。すると、向こう岸から渡って来るアンチ・ファンたちの間からはすかさず、「アホやなか！　やおなか（抜け目のない、したたかな）おなごン見かけにコロッち騙されて鼻ン下ときんたまン皺どんビローンち伸ばしたごつして！……」などと揶揄し挑発する声があがる。こうした言葉の応酬がそのうち罵り合いに、またそのうち小突き合い、さらには掴み合いのケンカへと発展していくのだ。

その典型が、直太が東京の公美子叔母から送って貰ったタックルボーイたちの間で起こったいざこざだった。タックルボーイは人形（ひとがた）をしたプラスチック製玩具で、形も大きさも皆おなじのっぺらぼうのが、色だけは全身赤いのと青いのと黄色いのと緑のと白いの茶色いのと、それぞれ何体ずつかあった。ふつう組み体操のように幾つか組み合わせて遊ぶのだが、約半分は直太の「じっけん」で一度折れ欠いた腕や脚を接着剤とセロハンテープで補修した痕跡がみえる。やはり彼らも仲間裡で二つのグループに分かれ、橋板を〇脚の短足でドタドタ踏み鳴らしながら円筒形の胴体をぶつけ合ったり、「前ニィ倣イ！」の恰好で真っ直ぐ水平に伸びた腕で取っ組み合ったり殴り合ったり、球状の頭部で頭突き合戦をしたり……。ふだん十把一絡げで没個性の見本のごとく扱われる鬱憤でも晴らすかのように、妙にエキサイトして暴れ狂っていた。

他の者たちは最初、そんなタックルボーイたちの様子を滑稽だと冷笑しながらみていた。が、そのうち彼らの熱気に触発されたかのように、また日頃おもちゃ箱の中でくすぶって

いる屈託や鬱憤をぶつけ合うかのように、暴れだした。ファンは自分と逆向きに橋を渡って来るアンチ・ファンに、アンチ・ファンも自分とは逆向きに渡って来るファン相手に、手当たり次第に殴り掛かるやら掴み掛かるやら、広くもなくてむしろ手狭なだんぺい橋の上は、

――修羅の巷。

こうなるともう興奮し切った彼らには、直蔵の「すんまっしぇんばってん、ちょっと脇さん除けて、通してはいよォ～！」の声も耳に入らぬ。これに苛立ちをつのらせたリカちゃんはつい地が出て、「あアせからっさ、こ奴っどめは！……」と癇癪を起した。「こげなじぇんいん（全員）同じごたっとのゾロゾロゾロゾロいごいてさるきょっとば（動き廻っているのを）見っと、あたしゃほんに気色ン悪ぅなっとよ！いっそン事こンとびぐち丸で、びゃーーーッちゅうて行くついでに、先の尖がっとるとこりぃ（その先の尖端部）でいっちょふたつ、びゃびゃびゃびゃびゃーーーッちゅうて突ッ殺して轢ッ殺して行こい（行こうよ）！　そすと胸のスゥーッち為っじゃろだい――」

それを聞いて直蔵が、そりゃあんまりだとおもっている折も折、すっかり興奮し切って物狂おしくなったタックルボーイの群れが、もうファンとアンチ・ファンとの見境も何も失くした錯乱状態で、リカちゃん目懸け殺到して来たのだ。のっぺらぼうのくせに何かわけのわからぬ事をおめき叫びながら……！　中でもその先頭を駆けて来た赤いタックルボーイなんか完全に瞳孔が開いていて、直蔵は、その焦点を失った目や恍惚とした表情が瞬く間に迫って来たのをみて、「ばかッ！」反射的に叫ぶと慌てて両足を踏ん張り、とびぐち丸を止めた。相手は、とびぐち丸の尖端部を目懸けて自ら跳び込んで来て正面衝突する寸前、突然「きゃッ！」と叫んで、橋板の隙間にでも躓いたのか突んのめって転んだ。おかげで惨事は回避され、直蔵が安堵したのも束の間、おなじ瞬間をとらえて別の惨事が起こっていた。

とびぐち丸がいきなり急停止したので体勢を崩したリカちゃんは、慣性の法則で直蔵に後ろからぶつかった直後、その反動で今度は真後ろへと弾き飛ばされ、ふわっと宙に浮いたままゆるやかな弧を描くと、

――べしゃーんッ。

橋板の上にひっくり返った。ヌエもどきの化け物三兄弟が未練がましく後をついて来ていて、ちょうど彼らの眼の前まで後ろ向きで飛んで来ると、受け留める間も無く落下した。だもんで彼らも突然の事に驚きながら、わわわッと駆け寄って、「ごんしゃん……、リカお嬢ちゃま……！」

あられもない恰好で仰臥したリカちゃんを呆然と見下ろしていた。》

《リカちゃんは、だんぺい橋のほぼ真ん中辺りの橋板の上に、

――べしゃーんッ。

仰向けにひっくり返ったきり、暫くは起き上がれそうもな

かった。その様は、直太の野遊びの師匠である松島工務店の次男坊和則君が、ザリガニ釣りの餌にする蛙を頭から石にビシャンッと撲きつけて殺す、その時の断末魔の姿をも想起させた。とびぐち丸に跨っていたままの、股をあられもなくおっ広げた恰好で仰臥し、おしゃれなパンプスを履いた両足がピョコンッと天を指し示すかのように上へ向かって伸びていた。そのため、上下逆さまになった赤いギンガムチェックのミニスカートの裾がお尻の方までめくれ上がって（めくれ下がって？）、脚線美を誇るスラリと伸びた両脚ばかりか、いかにも清純派美少女アイドルに似つかわしい白いパンツまでが丸見えとなってしまっていた。そんな無防備な姿を惜しげまなくさらし、だんぺい橋の上の真ン真ン中に横たわって衆目を集めている今現在の状況に、リカちゃん自身ちっとも気づいてはいない様子だった――。

直蔵は、ヌエもどきたちが捗々しく動こうとしないので、為方なく自分でとびぐち丸から降りて救助に向かった。そしてリカちゃんが横たわっている傍らにしゃがみ込むと、彼女の頭から上体にかけて抱え上げ、名前を連呼しつつ「しっかり為ぇんね、ホラ目ば覚ましんしゃい、おーい、おーい、もしもぉーし……！」揺すってみたものの、反応が無い。

時にただならぬ気配を感じて、はッと顔を上げ周りを見まわすと、何と、リカちゃんのいう「おもちゃ箱ン中ぇ棲みついとるウゾームゾーのポンコツ・ガラクタども」が大勢つめかけて来ていて、自分たちの周囲をびっしり隙間無く取り囲んでいた。そのくせ、さっき迄の喧騒がまるで夢か幻だったかのように、彼らは気味が悪いほど森閑と静まり返っているのだった。

「……！」直蔵はその静寂の奥底に、得体の知れぬ緊張が孕まれ強まりつつあるのを感じ、彼ほどの胆力を持つ者でも戦慄を覚えた。実際、空気が異様なまでに張りつめ、引き攣れて軋む音すら、ぴきッ、ぴきぴきぴきッ……と聞こえそうな気がした。直蔵が身顫いしたのと同時にリカちゃんが覚醒たらしく、なにを勘違いしたか、

「なんねアンタ直蔵ちゃんな、そげなパンツでん穿いとらんスッポンポンの尻で、しんのす（尻の穴）おっぴろげて屁どんぶちかますごつ、こンあたしばいきなり突きとばしてから……！」食ってかかって来た。むろん、まともに相手をしている余裕は無い。文句をいいつつむやみに振りまわすリカちゃんの手頸を掴み、とびぐち丸のほうへ連れ戻そうとした。

が、邪魔が入った。周囲から何本もの手が伸びて来て、直蔵をリカちゃんから引き離そうと腕や肩を掴んだり、頸を絞めるように咽喉元を扼したりして来たのだ。

――アラしもた（しまった）！

そうおもったときにはすでに遅かった。直蔵は、とびぐち丸からすこしでも離れると、忽ち元の直蔵に戻ってしまう。天界きっての悪童で鳴らしたとはいえ、まるで陸に上がって皿の干上がった河童だ。抵抗むなしく、よりによってヌエもどきの化け物たちの手で橋板の上に押さえつけられ、身動き

する自由を奪われてしまった。そうなると、さっきリカちゃんがいった「びゃびゃびゃびゃびゃーーーッちゅうて突ッ殺して轢ッ殺して」でも脱出を図るのが、正解だったろうか？

リカちゃんもヌエもどきの片割れの手で捕まっていた。最初は「わかった、もういっぺん専属のボディーガードに雇うてやるけん、あたしば助けて！　イザっちゅう時にあんたどんが頼りになっとはわかったけん、こン手ば放してくれんね……！」空手形を繰り出してはみたが、無駄だとわかると一転、「コラ生意気かぞ、ヌエもどきの気色ン悪か化け物の分際でこンあたしに触るな！　触るなちいいよろうが、こン助平が！　放せ、早よ放せちいいよろうが……！」激昂にまかせてジタバタ騒いでみたけれど、後の祭りだった。

直蔵は抵抗をやめて力を温存しながら、なんとか虎口を脱する機会を窺った。さっきのようにリカちゃんのファンとアンチ・ファンとがまたぞろ入り乱れてケンカをおっ始めてくれれば、どさくさに紛れてとびぐち丸との接触を図ろう。それさえ叶えば、後はこっちのものなのだが……。だが彼らはもう乱闘に飽きたとでもいうのか、直蔵の期待は裏切られた。

というのも、あの虎の覆面を被ったプロレスラーとゴリラ型戦闘用ロボット、これ迄それぞれの陣営を束ねてきた領袖が一対一の決闘を、このだんぺい橋の上で行うことになったのだ。その直接対決を以て、リカちゃんのファンとアンチ・ファンとの間で繰り拡げられてきた抗争にキッパリ決着をつけようということになったのだった。虎の覆面レスラーが、「俺ィがなんがなんでん勝って、リカちゃんば今の清純派美少女アイドルからそれ以上の美の女神しゃまに、美の唯一絶対神に昇格させちゃるッ！」胸や肩や腕の筋肉を早くも躍動させながら宣言すれば、ゴリラ型戦闘用ロボットも、「なんが美の女神しゃまね、なんが美の唯一絶対神ね！　こげな音痴の大根役者で、しぇいかく（性格）でん悪ぁ～るかつに女神しゃまげな、可笑しさぁ～たい！」といって相手を挑発する。そうした言葉は、お互いの間でやりとりされるばかりか、両者の配下の者たちの耳にも逐一入るのでいよいよ退くに退けず、両者とも闘志を燃えたぎらせるばかりだった。

そんな両雄が両岸から勇躍だんぺい橋の中央部へと進み出て来るときには、さっき迄は統率を失った暴徒と化して入り乱れて暴れていた連中が、ざざざざぁ～ッとばかり欄干際に除けて、忽ちそこに一筋の花道が出来た。そこを、両雄とも真っ直ぐな視線で睨み合いながら、決闘するために駆け寄って行くのだった――。≫

【十二】

≪筋骨隆々とした肉体自慢の虎の覆面レスラーは、直太に「じっけん」で片腕をもがれたがため隻腕なのだった。だが、直太が周りの錦の布を喰い破ってからは彼のおもちゃに格下げされた仏壇の鈴のばち棒を代わりに嵌め込んでみると、これがピタリと嵌まってお誂え向きの義手、というより肉体の一部としてのこん棒となった。対するゴリラ型戦闘ロボット

も、これまた内蔵されているゼンマイ仕掛けの機械を直太に壊され、足が交互には動かぬ不具合をかかえていた。だが、戦闘用ロボットというだけあって全身が強力な武器だ。その両者が、だんぺい橋の上の中央部で肉弾相打つとともに取っ組み合う、激烈な格闘が展開された。

彼らの死闘は、腕の長さと太さが物語るように膂力でまさる戦闘用ロボットの、馬力に物いわせた直線的動きから繰り出される一撃必殺の打撃系の攻撃を、変幻自在のテクニシャンで寝業師の覆面レスラーが巧みに絡みつき接近戦に持ち込んで躱しながら、こん棒で相手の脾腹を連打しスタミナを、エネルギーを殺ごうとする展開となった。こうして実力互角どうし一進一退の攻防を繰り返すばかりで、互いが決定打を欠くうち消耗ばかりが徒に激しく、このまま続行すると共倒れ必至と予測された。それでも両雄、片やリカちゃんファンの、片やそのアンチ・ファンの同志たちに君臨し大将だの総帥だの親方だのと立てられ、各陣営を牛耳って対抗し合ってきた強者どうしだ。先に音を上げて泣きを入れるくらいなら、いっそ刺し違えて相手を道連れに地獄へでも落ちようとおもい極めるところ――。

しかし、互いが自分の実力と持ち味を十二分に出し尽くしたところでとうとう、どちらからともなく、「お、おいやん、ハァハァハァ……、この辺でもう、ハァハァハァハァハァ……、てぇげぇ（大概）良うなかろか？」いかにも苦しげな息の下から、「ゼェコゼェコゼェコ……、あぁ、俺ィもちょうどそげんおもいよったくさ。ゼェコゼェコゼェコゼェコゼェコ……、くそッ、きぃ～つか！」息も絶え絶えとはこの事で、「そんなら引き分けに為ゅうか？　ハァハァハァ……、俺ィはそりぃで良かが……」そのひと言を待ってましたとばかり、「そげん為ゅい（そうしよう）、そげん為ゅい！　ゼェコゼェコゼェ……、痛み分け痛み分け……！」お互い直太の「じっけん」の被害者なので、大きな損傷を受けた部分以外でも古傷が痛みだすと、その陰気な疼痛が彼らの闘志を鈍らせた結果、ついに両者痛み分けの引き分けと相なった。

こうして、今の今まで激闘を展開しつつあった両雄が互いの実力を認め合って矛を収めると、まるで憑き物でも落ちたかのように表情がゆるみ、長年の旧友・親友同士が琴瑟相和すかのように打ち解け合った。

「そもそも、何でこげな大喧嘩やら為ぇにゃならんやったつかね？　骨折り損のくたびれ儲けちゃこン事ったんも、のも、あなっつぁん！　阿呆ンごて！」

「いやぁ～もう、我ながら気でん狂うとったっちゃなかろうかね。ほん～なこて（ほんとーに）無駄に元気ば使い果たしてから……。それにしたっちゃお互い善う闘うた闘うた……！」などと健闘を讃え合った。

それから、憑き物が落ちたところで、その憑き物の正体を糾明していくうちに、「どうも俺ィどんなリカちゃんに良かぁごつ操らるっまんま、ファンとアンチ・ファンとに分かれて争いよったっちゅう、そげな按配じゃなかったろか……」

「そうたい、リカちゃんたい！　清純派美少女アイドルか何か知らんばってん、あン女狐さえ居らんやったら、こげんワアワアいうて死ぬごたる思いして闘う必要てろん無かったとばい！」

「そりゃ無かったろ！　親ン敵打ちじゃあるめえし――」

なにやら話の道筋は、都合の悪い事は全部リカちゃんに背負わせて、自分たちの愚かしさは棚に上げるか頬っ被りを決めこむ方向へと流れてゆくようだった。

「だいたい考えてんね（考えてごらんよ）、ファンやけんちゅうてアンチ・ファンばくらさにゃいかん（拳骨をくらわせねばならぬ）理由やら、いっちょでん無かつばい。そりぃば、どうもくらさないかんごたる雰囲気ちゅうか、場の空気の醸されたらそれに酔っ払うたごつなって……。なんか為ょっても嵌め込みの甘うなっとる腕の、ぽろッ、ち外れてやお（うまく）いかんときやら、『アンチ・ファンの奴っどめが悪かァ～、くらさにゃ気の済まんッ！』ちゅう具合に、なんも悪ぅなかあんたどんに八つ当たり為ぅごつなりょったもんねえ」

「そげんいうなら、こっちだっちゃおなしくさん（こっちも同じさ）。アンチ・ファンやけんちゅうてファンばくらせにゃならん理由やら何一つ無かったとばってん、俺ィは俺ィで、じぇんまい（ゼンマイ）の壊れて前ンごつ歩こうにも足が交互に上がらんで、たまにぁ何ちゅう事も無か木の根っこにでんつまぢ（躓）いて転ぶ。そしたら『こりぃもじぇんぶ（全部）リカちゃんファンの奴っどめが悪かァ～、あ奴どめばくらさにゃ気の済まぁんッ！』ちなる。こりぃもまた八つ当たりちゅうわけたんも、のもッ。ふふっ、ふふふふっ……」

「ほら、ねえ、よう考えたら……。だけんくさ、俺ィどんがすっかり気の狂うたごつなっとったつも、あン女狐に化かされて、きんたま握られて操られとったちゅう按配たい！」

彼らの理屈によると結局、リカちゃんという存在こそが彼らを無意味な暴力、不毛な抗争へと導いた、

――元凶。

そういう見立てになるらしかった。》

《直太の「じっけん」で強度と耐久性を試されたのが運の尽き、躰のどこかを修復不可能なまで破壊され損傷を負わされた彼らは、結局のところ同病相憐れむ者どうしだ。ゴリラ型戦闘用ロボットが、「古傷のしぇい（所為）で昔ンごつ躰のいごかんな術無うしてくさん（躰が動かなくてどうしょうもなくてさあ）……。そげな時も無理に強がって何とか踏ん張って来たばってん、『生きとっだけで、ハ～ァ、やおなかねェ～（しんどいなァ～）！』ち、つい弱音ば吐こごつ（吐きたく）なる――」しみじみとした口調でいう。

すると、虎の覆面レスラーもそれを受けて、「そらあんただけじゃのうして、俺ィも、ここに居る誰っでんが大概おなし（同じ）事ったん。『こげな術無かとしぇい（渡世）で、何かに縋り付いとかんなら、ハァとてもじゃなかが生きとられん！』ち、最近なとくにそげんあるが。寝ても覚めてもリ

カちゃんリカちゃんちゅうて親衛隊まで結成して、わが隊長の何のちゅうて大将になってワアワア騒ぎょったつも、何かに縋ろうごたったつばい（縋りたかったんだよ）」

すると また、戦闘用ロボットが、

「そりぃが信仰てろん信心てろんっちゅうもんやなかとね。つまり、大事なかとは（大事なのは）宗教ばい――」と確信ありげに首肯いた。そして、「あ～ァほんなってぇ、鰯ン頭も信心からじゃなかばってん、何かば信じ切っとかんなら術無うしてくさん！」

「おろォ（あらァ）、そン鰯ン頭ちゃ何ね、何事ね？」覆面レスラーが訝しんで尋ねる。

そこで、戦闘用ロボットが「信仰心のあるぎっと鰯ン頭でん何でん有り難う感じらるっちゅう諺ばってん、『神様仏様は姿の見えんだけで居らすけん信じ切れェ、ゴチャゴチャいわんな信じ抜けェ～！』ちいわれたっちゃ、姿形も影すら無かなら信じ切れんやろが。その点、リカちゃんな、どげん性格の悪かったっちゃ美少女の姿形があるけん、『愛しのリカちゃん、こン命ば捧げますぅ！』ちゅうて有り難がっとったろうもん？」

「うん。ばってんもう懲り懲りしとるばってんね……」とリカちゃんのほうに醒めた一瞥を送る、覆面レスラー。

ゴリラ型戦闘用ロボットは、どうやら前々からおもうところあったと見え、「良か機会じゃけん、みんなに折り入って相談の有っとばってん……」と虎の覆面レスラーばかりかその場に居合わせたほぼ全員をざっと見渡してから、

「俺ィは宗教ば始めようちおもう」と宣言した。そのうえで、

「ばってん今いうたごつ、姿も形も影すら無かもんな信じろちゅうても信じ難かろが。そりぃで、鰯ン頭じゃなかばってん、神様の宿らっしゃる憑代ちゅうが、わかり易ういうと御神体ば定むぅでおもう。そこで相談ちゅうとは、俺ィとおなし神様ば信じるっちゅう者だけで良かばってん、何が良かろか？」つまり神の憑代、あるいは御神体を何にしようか、というのだ。「まあ何ちゅうても肝腎なとは、どげな横着者でん『軽々しゅう扱おうもんなら神罰ん当たろうたい！』ちそげんおもうごたる貫禄っちゅうか風格っちゅうか、威厳の漂うとかんば（漂ってなくちゃ）！ 俺ィどんがごつプラスチックてろんビニールてろんの、ペラァペラしたごたる合成樹脂でどん出来とったっちゃ、駄目ばい、有り難味の無か……」

すると、彼と意気投合した虎の覆面レスラーが、

「貫禄の風格の威厳のちゅうて、すぐ壊れよんなら台無しやろけんがら、滅多な事っじゃ壊れん事が第一条件じゃろたん。そげな物のあるかね？……」

それを聞いて、直蔵は厭な予感に胸騒ぎを覚えた。彼はヌエもどきの化け物たちの手で捕り押さえられ、そのままリカちゃんとともに橋板の上に押さえつけられた状態で身動き取れずにいたが、なんとか隙を突いてとびぐち丸との接触を図る機会を窺っていたのだ。すると案の定、彼のその厭な、悪い予感が的中したではないか――。

その時だんぺい橋の上に居合わせた者たちの中でほぼ全員の視線が、まるで磁石に吸い寄せられる砂鉄のように、主を失って橋板の上に放置された、

――とびぐち丸。

その直蔵がいつも跨っていた鋼鉄の塊へと集中し、次に指さしてガヤガヤいいはじめた。

「よしッ、よぉーし、こンとびぐち丸なら良かッ！　俺ィどんが崇め奉ってお祀りする憑代として、こげん理想的なか逸物はなかぞ。でかした、でかした……！」

「おオ、こりぃこそが御神体としてふさわしかッ！――」

ゴリラ型戦闘用ロボットも虎の覆面レスラーも手放しの喜びようで、どちらからともなく握手を交わしたかとおもうと、あまつさえ両の手を取り合ってその場で跳ねまわって踊り、歓喜を最大限に表現した。それぞれの配下の者たちも、すでにリカちゃんのファンとアンチ・ファンとの分け隔て無く、歓喜に酔い痴れていた。そうしてひとしきり大いに喜びを分かち合っていたが、やがて覆面レスラーが、

「御神体はこンとびぐち丸ちゅう事っで決まりたん。ばってん次は、俺ィどんが神様は何ちいわす神様か、いっちょ良かお名前ばつけて差し上げにゃいかんめえもん。何が良かろかね、神様ン名前は？」

するとやがて、腹の皮の破れ目から中綿がはみ出しかけた熊のぬいぐるみが、

「妙に洒落ぇ～た金ピカんごたる名前なら、俺ィが『なんとか様ァ～』ちゅうて拝むとき恥ずかしゅうて厭ばい。だけんちゅうて、あんまし芸の無かつも有り難味ん無うしてアレやけん、とびぐち様、うんにゃ、とびぐちの命でどげんね？」

それを受けて周囲では、「とびぐちの命げなァ～」といって賛否両論・甲論乙駁がワイワイガヤガヤと交わされた。虎の覆面レスラーとゴリラ型戦闘用ロボットの両雄も、ついさっき肝胆相照らす仲となった者どうしでヒソヒソと耳打ちし合うこと暫し、

「とびぐちの命か――。まあそげん悪ぅもなかごたるが……」

「うん。名前は呼び易うして耳に馴染むとがいちばんじゃろけんね。俺ィも良かちおもう」

「要はこっちの心懸け次第やけん、純粋か気持ちで『とびぐちの命ォ～』ちゅうて一心に拝みよりゃ、憑代の御神体によりいっそう魂の入ろうけん神様らしゅうならっしゃろや！」

こうして彼らの神様のお名前がトントン拍子で決まった。すなわち、

――とびぐちの命。

なんだか冗談のようだが彼らは至って真剣で、そして真剣であるほど一種の狂気が剥き出しとなってくるようだった。

ゴリラ型戦闘用ロボットが、早くもとびぐち丸に一礼すると柏手を打ってから、至って生真面目な様子で、

「ヨシそんなら、こンとびぐちの命の御神体ば、こンまま橋の上にゃ置いとかれんめえけん、あン赤煉瓦の醸造蔵ン脇のちいっと場所の空いとる所にどん運んでって、お寺の山門の

仁王さん達と並べてお祀り為ょい！　あといっちょはお供え物の事ばってん、何ばお供え為っと喜ばっしゃろか？」
　すると、虎の覆面レスラーが「そんなら……」と、ヌエもどきの化け物によって橋板の上に押さえつけられ、すっかり腹を立ててプンプンむくれているリカちゃんを指さし、
「リカちゃんたちにお供え物になってもらおい！　ちょっとかわいそかばってん、しぇっかくこけ（せっかくここに）居らすし、おなし人身御供ちゅうてもどうしぇなら美女とか可愛ゆらしか子供ン方が、俺ィどんがとびぐちの命っしゃんも喜ばっしゃろうし……」リカちゃんの呪縛から解放された今となっては、平気でそう提案した。
　これには戦闘用ロボットも、「なるほど、とどンつまりが生け贄っちゅう事ったいね。そら良か――」
　彼らの意見にはリカちゃんと直蔵を除いた全員が賛成らしく異議を差し挟む者も無い。
　ただ、リカちゃんは咬みつくような口吻で物申した。
「なんが生け贄か、なんが人身御供か！　要するに、わがどんが手にかかって死ねっちゅうとか、こンしと（人）殺しが！　そげなつぁ厭ばいッ、冗談じゃなか！　まだ死のうごんなかッ（死にたくないッ）！　じぇったい死のうごんなかッ……！」目と顔の色をすっかり変え、半狂乱になって精一杯身悶えして騒いだ。しかし、彼女をその場に捕り押さえている連中――かつて彼女の用心棒役を務めたヌエもどきたち――からは、無情にも、むぎゅーう、と躰を橋板に押しつけられ、「ぐえ～ッ！」とまるで踏んづけられて半死半生の蛙か何かのように呻いただけで終わった。
　戦闘用ロボットが、そんな彼女の空しい抗議などまるで無かったかのように、しかもリカちゃんと直蔵にも聞こえよがしに、「おぉッ、そらぁ良か！　人身御供の人柱のちゅうて生け贄ば捧ぐっと、俺ィどんがとびぐちの命もきっと霊験あらたかな神様に成んなはっ事の、まちがいなかろ。よしッ、そんならいっちょリカちゃんとキューピーしゃんに生け贄になってもらわないかん！」するとそれを聞いた者どもが、大喜びして跳びはねながら、「おオ、もらわないかん、もらわないかん……！」と、これにて衆議一決。
　だが、リカちゃんと直蔵だけは賛成も納得もできるわけが無い。とくにリカちゃんは、直蔵がもう諦めたようなフリをしているのと対照的に、「そげな人身御供の人柱のちゅうて、わがどんなしと（人）ン命ば何ちおもうとっとか！　厭ばいッ厭ばいッ厭ばいッ……！」清純派美少女アイドルとしてちやほやされこそすれ、こんな酷い扱いを受けたのは初めてで、しかも行き着く先が新たな神に捧げられる生け贄では、お先真っ暗もいいところ、堪ったもんじゃない。そこで元々口が達者な彼女のこと、「そげな非科学的な神様ごっこてろんばしたけんちゅうて、あんたどんが何の幸せになるっ（なれる）もんか！　逆に、あたしば虐待して殺すなら神罰の当たったい、こンしと殺しどめが！　だいたいあんたどんな、ファンはリカちゃんリカちゃんちゅうて好か気色になって、アンチ

・ファンだっちゃあたしば音痴の大根役者の可愛い子ぶりっ子のちクソみそにいうて、ストレス解消してスッキリ為ょったとでしょうが！　あたしンおかげで好か思いばしたくせに、こげな仕打ちば為ってろんな酷か、酷すぎるやんね！」泣きながら怒り、怒りながら泣く中から、言葉を絞り出すようにしての猛抗議――。

しかし、彼女の親衛隊長まで務めた虎の覆面レスラーは、「まあまあ、こりぃも民主主義の多数決の原則に従うて、もう決まった事やけん……」と、しれぇ～ッとした尤もらしい態度で、「そら俺ィでんちぃった気の毒っかごつぁあるばってん、おなし死ぬとでん神様の人身御供になって死ぬぎっと成仏の極楽往生の何のちゅうて、後生はじぇったいまちがいなかろうけんのい。そげな良か後生ば期待して、リカちゃんもキューピーしゃんも観念してはいよォ～！」と、いかにも引導を渡すかのようにいったもんだ。

直蔵は、はらわたが煮えくり返るような怒りを覚えたが、あえて聞き流した。今は怒りを溜め込んどいて、後で反撃する際の力の糧としてやろうじゃないか――。不撓不屈の魂で以て直蔵自身にそう語りかけた。

しかしリカちゃんは、鹿爪らしい「民主主義の多数決の原則」とやらにやられてしまったのか知らぬが、自分にだけ都合のいい妥協案の提出にはしった。「生け贄の人身御供のちゅうて、なんも二人ペアで捧げにゃいかん決まりは無かっちゃろォ。そんならいっちょそン大役ば、天界の神様から善徳ば積むごついわれて遣わされて来た直蔵ちゃんに任すっと良かたい。そりぃで直蔵ちゃんも本望やろたい――」追放刑に遭って俗界へと下って来た堕天使の、脛に傷持つ直蔵の足下をみて、イケシャアシャアとそういったのだった。

――な、何ちゅう事ば……！

直蔵はさすがに呆れ返っておもわずリカちゃんの方へと顔をめぐらせた。リカちゃんの美しい顔は、この急場をしのぎ切ってとにかく生き延びようとする動物的本能でギラついて見えた。それをみた直蔵は急に醒めた気分になって物いう気も失せた。それに、大好きなとびぐち丸が神の憑代、御神体として崇められるための人身御供だったら、

――そげな最期も悪ぅなかかんしれん……。

そんな半ば捨て鉢な諦念すら頭をよぎった。その一方で、そもそも天使も死ぬのか？　永遠の子供だから不死身だと前に聞いた気もするが、はて……？　だが俺は、天使たる者の歩むべき道を踏み外した堕天使だから、やっぱり死なぬ保証など無いのか？　などと、この期に及んでも割と冷静に考えを巡らしていると、

「そんならくさ、とりあえずキューピーしゃんにだけ人身御供になってもろとこい（もらっておこう）」と、ゴリラ型の戦闘用ロボットがいった。「そりぃでもし不足んあるごたるなら、そン時ゃ後から追加のおかわりっちゅう事で、リカちゃんにも生け贄になってもろうたら良かろうたい」

「うぇうぇうぇうぇうぇッ、そげなつぁ厭ちいいよるやん

ね！」リカちゃんが顔をこわばらせて抗議したが、誰も受けつけなかった。それどころか、かえって「うん、そげん為い（そうしよう）、そげん為い！」と賛意を示す声がそこここから湧き起こった。こうして、まずは堕天使の直蔵がてるてる坊主みたいに頸に縄紐でも巻きつけられ橋の欄干から吊り下げられることに、そして清純派美少女アイドルのリカちゃんがその予備的な補充要員ということに決まった。リカちゃんが、何と残酷な仕打ち、血も涙も無い鬼畜か、おまえらはと自分が助かりたい一心でさんざん文句をいったが、それも馬耳東風といった感じで聞き流された。そんな彼女は、何かの弾みでふと直蔵と目が合いかけると、さすがに疚しいのか気まずげにそっぽを向いたきり、もう直蔵のほうを見ようともしなかった。

直蔵は頸に縄紐を巻き付けられた。とびぐち丸改め「とびぐちの命」を赤煉瓦造りの醸造蔵の脇に移動させた後、その御神体にみえるよう今居る橋の欄干から掘割の水面の上に吊り下げられるのだという。ちょうどてるてる坊主を想わせる恰好で――。》

《彼らの宗教を創始する作業は彼ら全員の総意に基づき軌道に乗って、順調に進んでいきそうにおもわれた。

「よし、生け贄の準備が出来たけん、今度はいよいよとびぐちの命の御神体ばお遷りいただくぞ。こンままだんぺい橋の上に鎮座ましましとったら、しぇっかく人身御供ばぶら下げたっちゃ、ちゃんとお目に入らんめえけん。こン橋から下さんブラーンち吊り下げぐっとやけん、そりぃば見物すっとにいっちゃん良か場所の特等席までお遷りいただかんば、勿体なかろが！……」という事になって、直蔵とリカちゃんを逃がさぬよう捕り押さえているヌエもどきの化け物三兄弟を除く全員が、御神体となったとびぐち丸の移動に携わる運搬要員として駆り出された。むろんそんなに大勢の手を煩わす必要も無かろうが、もはや神事となると事情が変わってきて、

「どうしぇなら御神輿んごつ周りからも賑やかにワッショイワッショイ景気づけに盛り上げよる中ばお遷し申し上ぐっとが良かろ――！」

ところが、運搬要員を買って出た力自慢たちが周囲に取り付き、力を合わせて動かそうとしたが、動かない。「せーの、うんしょッ……」で息を合わせ「う～ん……」と力一杯試みたが、微動だにしない。「はぁ～、おむ（重）たさァ～、いご（動）かんねぇ～！」「だおもんのすったっかつ（怠け者で怠惰なの）が、途中で力ば抜いたろォ？」「誰ィがだおもんちね、誰ィがすったっかちね？　わが（おまえ）コラ、くらされやん（拳骨をくらわせられねばならぬ）ぞ！」と、険悪な雰囲気がたちこめる。見かねたゴリラ型戦闘用ロボットと虎の覆面レスラーが、

「つまらん事ってケンカすんなやん。そげな暇のあったらもっかいやってむっぞ！」

「ホラ、いっちゃかふうのどっこうしぇーッ……！」

士気を鼓舞しようと彼ら自身も先頭に立って、つまり総動員体制での総力戦で全力を振り絞ったが、渾身の力為事も成果を結ばず徒労に帰した。そればかりか、頑張ったぶんだけ心身の消耗が弥増してくたびれ果て、もはや立っているだけでも辛いとその場に崩折れると倒れ込んでしまう者も続出する始末。「はぁ～ッ、こげんてぇ（大）して太うもなかつに、根のはえたごつピクッちでんいごかんとやけん（動かぬのだから）、どげんなっととかね？　こン重さちゅうたら尋常じゃなか！　なんか変なかばい（変だよ）……」さんざん持て余した挙句、ついには、

「こンとびぐちの命っちゅう神様の『わがどん（おまえら）がおもうごつ、気安ういごいてやるもんか！』ちゅうて、つむじば曲げとらすとじゃなかとや？　『俺ィはわがどんが神様にてろんなろごっでんなかつに（俺はきさまらの神様になんかなりたくもないのに）、いらじらぁん事（要らぬ事、余計な事）どん為たごつしてからァ！』ちゅうて。そげんいうて腹掻かっしゃったつなら、俺ィどんが我が好かぁごつ為ょっと（自分の好き勝手していると）祟られやせんとかね？」

なんと祟りを恐れる者すら出る始末に、

「こらぁッ、なんが祟りか……、滅多な事ばいうな、縁起でもなか！」ゴリラ型戦闘用ロボットは苛立って怒鳴ったが、虎の覆面レスラーも結局のところ、「そんなら、もういっぺんじぇんいん（全員）で力ば合わして、いくぞォ。しぇーのぉー、よいしょーッ！」と、徒労の上塗りに全員を巻き込んだだけの事だった。

「今度っちゅう今度は、もう駄目ばい。ただでさえ壊れかけとる躰の、ホラますますガクガクするごつなってボロボロになりょる。ほんなこて神様の居らすなら、助けて欲しか！」

打つ手無し――。これが神意と諦めるよりないと途方に暮れていると、

「ばってんキューピーしゃんなひとっ（一人）で、どげんでん扱いよらしたばの」と、誰かが急に憶い出したようにいいだした。白いタックルボーイだ。彼は躰を反らし気味に大げさな身ぶり手ぶりまで交えながら、「単車ンごつ跨って、びゃーッ、ち乗ってさるきょったかちおもたら、そン先っちょのちいと尖っとっとこり（ちょっと尖っているところ）ば器用に遣うて、どげな事っでん為らっしゃっとやけん。アンチの奴どんがリカちゃんば厭がらすうでちょっかい出したときでん、そけ（そこに）、じしッ、ち引っ掛けて地面に、きゃふッ、ちゅうごつ撲きつけたかちおもたら、こんだ（今度は）掘割ン中ぇ、どぼんッ、ち放り込みょったつば、俺ィがこン目ぇでしかと見たとやけんね――」のっぺらぼうの顔の目の辺りを指さして力説した。すると、追随者が後から後から続出した。中でもやはりタックルボーイたちは日頃からどこにでも気安く出入りして、とくに醜聞めいた噂、ゴシップの収集に余念が無いだけに、今度は緑色のが「そン腕前ばリカちゃんに買われて、ヌエもどきば三匹とも職務怠慢ちゅうてクビにした代わりに、スカウトしゃれて用心棒になったげなや

んねェ」といえば、次は茶色のが「ばってん、キューピーしゃんは何じゃカンじゃちいい触らさるっとの厭で、しぶしぶ引く受けたつげなばってんのォ」といい、さらに黄色のが「ばってん、いつでん素っ裸で居っとは露出狂やけんで、いつでんのごつ（常時）とびぐち丸に跨っとるとは、糞小便ばいつまりかぶったっちゃ良かごつおまるば兼ねとるけんち、リカちゃんがいい触らしょったげな……」云々と、情報通を以て鳴らす面目ばかりか口の軽さまで披露した。そのため、彼らのお喋りは至るところに波紋を拡げ、とくに直蔵には聞き捨てならぬ露出狂とおまるの二つの疑惑――真相はリカちゃんの虚言癖により捏造されたデマ――までが表沙汰にされた。が、それらはあくまで余話にすぎず、

――直蔵がとびぐち丸の唯一無二の卓絶した遣い手であること。

その事こそが重要なのだった。

その時、疲労困憊して欄干の際にへたり込んでいた青いタックルボーイが躰を起こすと、

「そんなら初めからキューピーしゃんに運うでもろうとけば良かったろもん！」自分たちに徒労でしかない苦役を課した者たちに憤慨するあまり開き直った口調で、「そすと（そしたら）、こげぇーんきつうしのさんごつならんちゃ（こんなにしんどくて堪らぬようにならなくても）為事のしゃんしゃん捗ったろたい」いかにも恨めしげにまくし立てた。すると忽ち賛同者が現れ、とくに赤いタックルボーイなんか拳を突き上げながら、「そうたい、最初からキューピーしゃんにいご（動）かしてもろとけば、何ーんもこげんアラきっつぁ～（しんどいことよ）ちゅうて、骨折り損のくたびれ儲けで術無がらんちゃ良かったとばい！」彼らの言い分には多くの者たちが首肯き賛意を示したので、虎の覆面レスラーもゴリラ型戦闘用ロボットも配下からの信頼を損ねて指導者としての地位を失いかねぬ仕儀となった。≫

≪ここへ来て風向きは俄かに変わりつつあった。直蔵自身、その急展開ぶりをおやおやとおもって窺っていると、ついに、「そンならもうキューピーしゃんに運うでもらうしかなかろうたい。今は人身御供ン事ぁ後回し、後回し――」尤もらしく発言する者も出て来て、それが目下最善策と考えるのか、反対意見を述べる者はいなかった。その結果、頸に縄紐を巻かれたまま、だんぺい橋の上からてるてる坊主のように下の掘割に向けて吊り下げられる、そんな公開処刑の絞首刑に酷似したやり方で生け贄にされるのを待つばかりの身に、新たにすべきひと為事が付け加えられた。

直蔵はゴリラ型戦闘用ロボットから起き上がるよう命令された。それと同時に彼の頸に巻き付けられた縄紐を手放そうとしたヌエもどきの化け物たちは、虎の覆面レスラーから、その縄紐ばかりは絶対手放すなと注意された。そのため直蔵は、鼻面が出刃包丁になった人喰い鮫の顔の頸から下はザリガニ風の躰をした奴と、頭頂に一本角が生えたオオサンショ

ウウオ風の頭部に頸から下がオランウータンみたいな躰の奴と、直蔵の頸に巻き付けられた縄紐の端を握る二匹を従え、とびぐち丸に向かって歩きだした。すると、それをみた連中がザワザワと左右両端に、だんぺい橋の欄干際に除けたので、そこに一筋の通り道が出来た。もうさっきのように軽はずみな口を利く者も一切無く、ただ喰い入るように直蔵の一挙手一投足を注視していた。直蔵は彼らの様子をざっと見渡してみたが、彼らの顔の表情から内心の感情を読み取ることは容易ではなかった。ただ、ある者たちの表情からは期待が、またある者たちの表情からは怯えが伝わって来て、怯えの中身をもし言挙げしようものなら言霊が作用し恐れている事が具現化しそうで、そのややもすると恐怖に傾きがちな心をなんとか神信心の力で持ち堪えようとしているようにも映った。

だがリカちゃんは違った。世界は自分を中心に回転していると信じて疑わぬ彼女だけは、彼女のいう「おもちゃ箱ン中ぇ棲みついとるウゾームゾーのポンコツ・ガラクタども」が縋ろうとする神様なんかには用が無かったのである。それよりむしろ、人身御供になる役を直蔵一人に押しつけ、自分はぬけぬけと免れようとしたのは、他ならぬ彼女自身だ。それを根に持たれていたら後が怖いので、直蔵が未だとびぐち丸と合一を果たさぬうちに手を打たねば、それも下手な手でも打とうものなら、

――身の破滅！

そうおもった途端、血迷ったかのごとく叫びだした。「あんたたちゃ何ば為ょっと……、直蔵ば止めんね、早よ止めんねやん！　あんたどんなバカじゃなかね？　いま止めんと逆にやらるっじゃろが！」ギャアギャアとがなり立てはじめた。

が、時すでに遅し。直蔵が跨り合体を果たすと同時にまるでそれ自体が意志を持つかのように動きだしたとびぐち丸は、直蔵の頸に巻き付けた縄紐の端を握る二匹のヌエもどきに襲いかかった。人喰い鮫の顔を持つ化け物の大きな出刃包丁になった鼻面が振り下ろされるのを軽々と撥ね上げ、「あッ！」とのけ反ったところを間髪入れずそのいかにも凶器然としたギザギザと尖った歯の覗く口へと、その尖端部から突っ込んで行った。こうなるともう咬みつくどころではなく、逆に顎が外れるか口が裂けるかしそうになって「ぐえッぐえッぐえッ！」といって藻掻き苦しむところを、さらに咽喉の奥まで抉り込んでから一転勢いよく撥ね上げた。すると、首が「すぽんッ」と音たてて抜けた弾みに宙を舞い欄干の上を越えて、掘割の中へと飛び込んだ。それを見ていきり立った角のあるオオサンショウウオみたいな方も向かって来るところを、顎の下にしゃくれた尖端部をまずは打ち込んで身動きを封じた。しっかりと引っ掛けておいて、サイダーかビールの栓を抜く時みたいに下からやはり勢いよく撥ね上げてやると、こちらもすぐに首が「しゅぽんッ」と抜けた。たまさかリカちゃんの足下へ転がって行ったのを、彼女が「きゃあッ、気色ン悪さア！」と叫んで蹴ったので、やっぱり掘割の中へと落ちて行ってしまった。直蔵と離れ離れになっていた時のとびぐち

丸はただの物体、死物でしかなかったが、直蔵と合体した途端、まるで魂が忽然と宿って甦ったかのように動くのだった。
　その威力を見せつけられたリカちゃんはパニックに陥った。恐慌を来した彼女は、直蔵ととびぐち丸の逆襲を恐れて逃げ惑いながら、とても清純派美少女アイドルとはおもえぬ怪鳥じみた声でギャアギャアわめき散らした。「うぇうぇうぇうぇうぇッ……！　早よ直蔵ば捕り押さえんね、早よ捕り押さえんねじゃん！　先に始末しぇんば、こんだ（今度は）こっちがやらるうが！　わからんとかね、バカが！……」総がかりで直蔵ととびぐち丸を何とかするよう誰彼となく訴えかけた。だがもう彼女のいいなりとなる酔狂者は現れず、いっしょになって逃げ惑う者たちが圧倒的多数を占めた。≫

≪直蔵はとびぐち丸と再び合体を果たしヌエもどき二匹を血祭りに上げた勢いを駆って、リカちゃんを追い駆けながら暴れ廻った。彼の前から逃げ遅れた者たちは、その尖端による刺突の餌食となってばったばったと倒されていった。突っ掛けられて撥ね飛ばされると、ひとっ堪りも無かった。
　だが、ゴリラ型戦闘用ロボットほどの勇士となるとさすがに逃げずに、直蔵が駆るとびぐち丸を厚い胸板と自慢の膂力で受け止めようと立ち塞がった。彼のパンチをまともに躱にくらえば、とびぐち丸との合体で怪力を得た直蔵といえどもさすがに危うい。そんな両者が対峙して殺気立つ視線を交わすや次の一刹那、ぐぅわっしゃあああんッ……！　凄まじい衝撃音を轟かせ互いに正面から激突した。直蔵は猪突猛進の突貫技、
「とびぐちあたぁーっくッ！……」その必殺技に賭けた。反動でとびぐち丸から引き剥がされ躱一つで後ろへ持って行かれそうになるのを見越し、とくに内腿でとびぐち丸をきつく挟み込んで下腹部での密着度を高め、いつになく強い前傾姿勢をとって、なんとかもち堪えた。
　一方、戦闘用ロボットは後ろへと撥ね飛ばされ、どぅぐわぁ〜すッ、と橋板に背中から撲きつけられた。それでも立ち上がろうと必死に藻掻いたが、尖端部をもろに受けた胸の部分がひしゃげて陥没し、亀裂が幾筋も入って今にも砕け散らんばかりの状態だった。致命傷を負った彼は起き上がろうとする途中で力尽きた。リカちゃんのコアなファンたちでも逃げ去って行く者が多い中、躱を張ってリカちゃんの楯となったのは皮肉にも、さっき迄アンチ・ファンを束ねて君臨した彼だった。
　直蔵自身ももう何がなんだか、わけがわからなくなってきていた。ただ彼は、
　――この茶番劇ば終わらすには、リカちゃんば殺すしかなか！
　この禍々しい一念に取り憑かれ操られ導かれるまま、リカちゃん求めて暴れ狂った。そうなったのも、自分本位の利己主義とご都合主義に凝り固まったリカちゃんの裏切りに加え、年がら年中素っ裸の彼は露出狂だとか、とびぐち丸は彼のオ

モラシ癖のためのおまるだとかいったデマをいい触らされたことで、ついに忍耐の限度を超えたのだった。そんな彼の前に現れる者たちは、リカちゃんをはじめ大半が敵と映った。これだけ大勢いて、味方なんか誰も、ほんとうに誰一人、一匹たりとも出逢わなかった。それでも狂暴化した直蔵は恐れることを知らず、ただとびぐち丸だけを頼りに暴れ廻った。色とりどりのタックルボーイたちなんか、まるでボウリングのピンか何かのように薙ぎ倒された。その弾みで互いにぶつかり合い、手足を折る怪我をする者も続出した。直蔵の怒りと殺意と暴力が専らリカちゃんに向いていて、誰彼となく無差別に、ただやみくもに攻撃して来るのでないことを覚った者たちは、彼女に殉ずる気も無くて巻き添えをくってもつまらぬと這う這うの体で、だんぺい橋から遠ざかった。

　時折羽音をたてて滑空しながら、

「キューピーの正体みたり悪魔かな、たい！――」と挑発して来る奴がいた。ヌエもどきの三兄弟のうち唯一の生き残りで、あの頭部が烏天狗で狼男の胴体に翼になった両腕が生えた化け物だ。「ようも俺ィが兄弟ば二人ともやってくれたな！　天使の名ば語りょる悪魔め、兄弟たちの敵ば打ってやっけん覚悟ば為ぇろ！――」直蔵の肩甲骨の辺りに生えた小さな翼は所詮お飾りで、さすがのとびぐち丸も空は飛べないのをいい事に、空中から頭上を脅かす。そいつは翼の尖端に鋭い鉤爪の生えた大きな手が付いているが、飛んでいる最中には使えない。そのかわり、足の指も異様に長くてその先にも鋭い鉤爪が生えているので、それで上から掴み掛かって来た。直蔵は身を躱しながらとびぐち丸を振るって下から応戦するものの、防戦一方で敵を打ち落とすには至らなかった。

　と、そこへ虎の覆面レスラーも加わって、彼はヌエもどきの化け物を、「よしッ、ぬしゃようぞいうたぞ、ほんなこて美しか兄弟愛たい！……」と褒めちぎっておいて、「そんなら、ここはいっちょ俺ィと共同しぇんしぇん（戦線）ば張ろいやっか（張ろうじゃないか）！　そりぃで、こン偽物の似非天使ば殺すなら俺ィどんが生きる、逆に殺さるっならソラ死ぬくさん。そげな伸るか反るかの真剣勝負の、最後の大バクチば打といッ！」

　するとヌエもどきも空中から大声で、「おオ良かばんも！　そン共同しぇんしぇんの大バクチに、しゃんしぇいッ（賛成）！　望むところたぁーいッ！」

　そこへ脇からひょこひょこと出て来たリカちゃんが、覆面レスラーに歩み寄ると彼の分厚い筋肉の形が浮き出た背中を可愛い手でぴしゃぴしゃ叩きながら、

「うわいたぁ～、あたしンために命懸けで闘ってくるってろん（くれるなんて）、あなっつぁんたちンごたる勇者の居らすやら、嬉っさァ！　あたしゃもう感謝感激ばいッ！　こげぇん嬉しか事ぁなか――」そういって鼓舞した、といえば聞こえはいいが、単純な彼らの心を擽り煽り立てた。

　直蔵は、大根役者リカちゃんの芝居くさい演技に気を殺がれ、「阿呆らっさ、もうこの辺で止むい！　俺ィはあんたど

んに人身御供にさるっとこりで『くそぉッ！』ちおもて暴れたばってん、もうてえげえ（大概）気の済んだ。今日ン事ぁ水に流すけん、そっちもおあいこちゅう事で水に流してくるい（くれよ）。リカちゃんの為に犬死にしたっちゃ何の浮かばるうね――」お互い矛を収めようと仲直りを申し入れた。

ところが、ここからがリカちゃんお得意の手練手管で、「こン直蔵ちゅう露出狂のしかぶり小僧はこすうして（狡猾で）悪賢かけん騙されちゃ出来んばい！　見かけはほんに愛くるしか天使のキューピーしゃんばってん、堕天使の、ほんなこつぁ非行ばかし為ょった不良やけんね、天使ばしくじって追放刑に遭うて来た性悪の屑ばい！　あたしにでん気色ン悪ぁ～るか色眼ば遣うて誘惑すうでしたり、やめてちゅうたら今度ぁ夜這いば為かけっ来てくさ、厭がっとば無理やり為ぅでしたつばい！」と、直蔵がまったく身に憶えの無い悪行をでっち上げ濡れ衣を着せる。その挙句に、「なんが『水に流すけんおあいこ』か、なんが『リカちゃんの為にやら死んだっちゃ浮かばれん』か！　うまい事いうてあんたどんば油断させといて、掌返しでそン隙ば突いて奇襲攻撃ば為掛くっとが、こン卑怯者の得意技じゃん！　さア、ふたっ（二人）ともこン卑怯者ばギッタギタにして男らしかとこりば見せてはいよ！　サア早よ、早よ見せてはいよぉ～！」

まるでそれが第二ラウンド開始の合図だったかのように、覆面レスラーもヌエもどきも殺意を剥き出しにして攻撃して来た。地上では虎の覆面レスラーが義手代わりの鈴のばち棒をこん棒代わりにして殴りかかって来る。と同時に、空中からはヌエもどきがまた熊のような足の爪で掴み掛かって来る。二方面からの攪乱作戦に、苦戦に陥った直蔵をみてリカちゃんは、「そうそうそうそう、二度と立ち上がれんごつ撲きのめしてから、ズタズタに引き裂いてやっと良か！」鬼の形相とはいうが、一見虫も殺さぬかの美貌に酷薄な笑みが湛えられると、かえって鬼気迫っておぞましくみえた。

直蔵はとびぐち丸を腰だめに構えるような形で、覆面レスラーが振り下ろすばち棒を下から受けては撥ね上げ、受けては撥ね上げ……の防戦一方、攻勢に転じる糸口を窺う。しかし、ヌエもどきの化け物が背後から襲いかかって来るので、この状況からだと一発勝負で必殺技の、猪突猛進の突貫技である「とびぐちアタック」など狙っても駄目だろうと見切りをつけた。それ迄は受けては撥ね上げていたばち棒を、受けると見せかけて、ひょいッ、と躱してみた。急に手ごたえが失われた相手はバランスを崩し、おっとっとっとっ……とたたらを踏んで体勢が泳ぐところを、下から掬い上げるようにしてとびぐち丸の尖端部を相手の顎の下にこじ入れ、虎の覆面の縁に引っ掛けるとそのまま一気に引っ剥がした。

「ぐぎゃーッ！」覆面レスラーにとって覆面は命、その覆面を引っ剥がされ素顔を人目にさらされることは、レスラーとしての死を意味する。彼は反射的に橋板の上に身を投げ出すと、両手で顔を隠して突っ伏し、そのうちまるで断末魔のような声で慟哭しはじめた。

その隙に直蔵は、とびぐち丸の尖端に引っ掛かったままの虎の覆面を、ちょうどそこへ急降下して来たヌエもどきの頭に、まるで虫捕り網で蝶かバッタでも捕まえるときのように、すぽッ、と引っ被せてやった。いきなり目隠しされたも同然となったヌエもどきは、直蔵という目標物を見失い平衡感覚も失って、橋の上に墜落した。最初に欄干に激突した衝撃で躰が砕け、首・胴体・四肢がバラバラになって橋板の上に散乱した。また組み立てればよいとはいえ、その光景は無残という他なかった。

残る敵は、リカちゃんただ一人――。

だが、今のでもうじゅうぶんだと暴力に厭気がさし、リカちゃんが逃げだしたら逃げるにまかせてやろう、もう二度と逢うこともあるまいとおもっていると、

「直蔵ちゃ～ん、あたしン芝居はどげんやったね、捨てたもんじゃなかったろがァ」と、世評では大根級との演技力を自画自讃してから、「あたしン用心棒のボディーガードのちゅうたら、やっぱし直蔵ちゃんば措いて他にゃおらん。こげなゴチャゴチャゴチャゴチャした寄せ集めのげさっ（下策）か化け物やら、いっしょに居っだけでん恥ずかしかッ！　やっぱしクビにしてしぇいかい（正解）やった――」イケシャアシャアとそういうが早いか、足下に転がっていたヌエもどきの烏天狗に似た首を、サッカーボールか何かでも蹴るように、ぽこんッ、と一つ蹴飛ばした。すると、頭は橋板の上をころころころと転がってついには欄干の隙間をくぐり抜け、掘割に落下して、ぼちゃんッ、と水音たてた。これで掘割の水の中では、三兄弟が首だけで再会を果たすだろうか――。

その光景を、元・虎の覆面レスラーで今は素顔をさらしただのプロレスラーが、ぽかーん、と呆気にとられて見ていた。彼は、昨日迄はリカちゃんを偶像崇拝の対象としてほとんど神格化し、親衛隊長も務めてきたファンの中のファンだっただけに、彼女の信じ難い言動を目の当たりにして衝撃を受け、素顔を隠すのも忘れるくらい混乱の極みにあった。

「リ、リ、リカちゃん、い、いま何ちゅうたァ、そして、な、何ばしたァ？　ねえねえ、何ばしたとねて……」

我が目と耳を疑ってそう尋ねると、振り向いたリカちゃんは相手の顔に目を留め、一瞬見惚れたようにまじまじとみてから、「アラ、あんた割と好か男ねえ～」と呟くようにいったものの、相手が彼女のいう「おもちゃ箱ン中ぇ棲みついとるウゾームゾーのポンコツ・ガラクタども」の一員であることをおもい出すと、急に光の消えた目に薄ら笑いを浮かべて、「何ばした、ちゃあ何かね？　あたしが何かしたかね？……」と悪怯れもせず、すっとぼけて誤魔化すと、「あんた、まだ居ったと？」逆に責めるような険のある口調でいった。

直蔵は、リカちゃんみたいな娘に志操や節操や信義など求めても無駄なのに……、と何だかプロレスラーを痛々しく感じながら聞いていた。

「何ね、何かまだいいたか事のあっと？　あっとなら早よいわんね、あたしゃ忙しかっちゃけん……！」

リカちゃんのズケズケとした、あばずれ女のような物言いに気押されつつも、相手は、
「気に障ったら謝るばってん、バラバラにされてからまでそげんいわれて、転がった首までそげん蹴ったくられやんなら、かわいそうかちおもうて……」
「あっそッ、あたしが悪かちいいたかとばいね。ふんッ、あたしがあんたが想ぅとるごたる人間じゃのうして、そらァ悪かったねえ！」と、実にひねくれた言い方をした後、今度は完全に居直った口調で、「ばってん、あたしがあたしン好かごつ生きて、そン何が悪かと？　こりぃがほんなもんのあたしですたい、お生憎様！　何ね、あんたンごたる、おもちゃ箱ン中ぇ棲みついとるウゾームゾーのポンコツ・ガラクタの、こンあたしに説教すってろんな、百年、うんにゃ、しぇんねん（千年）早かったい！」
彼女がそういい切った途端、虎の覆面レスラー改めただのプロレスラーの中で何かが、
――ぷつんッ。
音をたてて断ち切られたようだった。
それと前後して、直蔵と彼が駆るとびぐち丸に打ち倒され、だんぺい橋の上を中心にごろごろと転がっていた者たち――リカちゃんのいう「おもちゃ箱ン中ぇ棲みついとるウゾームゾーのポンコツ・ガラクタども」――があちらでもこちらでも息を吹き返したように手足を蠢かせはじめたかとおもうと、ぬらぁ〜、と立ち上がって、ぞろぞろぞろ、ぞろぞろぞろ、ぞろぞろぞろ……陸続と寄り集まって来るのだった。そしてとうとうそのゾンビの群れはリカちゃんを十重二十重に取り囲んだ。
「ちょっ、ちょっと、あんたたち何……？　気色ン悪さァ、寄って来んでェ〜！　寄って来んなちいいよろうが――」
彼らはリカちゃんに何をいわれようが無言でかつ無表情なまま彼女を包囲する壁をつくり、その円陣をじわじわ狭めながら迫って来た。
こうなるともうリカちゃんは直蔵頼み。「直蔵ちゃん、助けて！　あんた、あたしの用心棒やろもん、ボディーガードやろもん……！」またぞろ直蔵の陰に隠れ、直蔵が彼らを追っ払うか薙ぎ倒すかしてくれることを懇願した。
ところが直蔵は、とびぐち丸を軽々と持ち上げると横に振るって、その舟形をした鋼鉄の塊でリカちゃんの後ろ頭を、いい加減にしろとばかり一つ、撲いた。
――ばひんッ。
軽く撲いたようでも、強かに打ち据えられたリカちゃんは、
――どぅぐわぁ〜す。
意外なほど大きな音をたてて投げ出されるように、橋板の上に倒れ込んだ。ゾンビのような連中は、直蔵がとびぐち丸を振るうのを黙って、無表情のまま注視していたが、その一撃を合図に次から次へとリカちゃん目懸けて襲いかかて行った。打ち倒されたリカちゃんは、もう声も立てなかった――。
直蔵はとびぐち丸に跨ると、だんぺい橋を後にした。彼の

後方で今後起こり得る事態に関しては、もう何の興味も湧かなかった。とりあえず、丸い大きな月が昇って来ている方角へと向かって、行ってみることにした。

その時、彼の耳に「生け贄やん、人身御供やん、人柱やん……！」我が意を得たりとばかり、誰も彼もが嬉しげに浮かれ騒ぐ声も届いた。しかし、リカちゃんをどこの何という神様にお供えするのかは、当面どうでもよくなっているらしかった。そればかりか、もうそこには事の善悪に関する道徳倫理やそれに基づく深い考えも何も無くて、ただ直太の「じっけん」で壊されたおもちゃたちの鬱積した恨み辛みと、それを晴らしたい欲求だけが渦巻いているようだった――。≫

【十三】

直太は独り遊びの途中から眠ってしまっていたようだった。彼の「じっけん」の所為でどこかしら壊れて半壊状態にあるおもちゃたちが、まるで日頃の鬱憤を晴らそうとするかのように大挙してゾロゾロゾロゾロ迫って来る――。そんな悪夢を見ていたせいか、寝覚めの気分は頗る悪かった。耳の底には、ばひんッ、とか、どぅぐわぁ～す、とか、彼自身が独り遊びの最中に興が乗ると自然と口にするオノマトペ――擬音語や擬態語の類――が生々しくこびり付いて残っていた。だがその時、まだ夢現にちかい心持ちで大きなあくびをした後の潤んだ目に、彼を一瞬にして覚醒させる物が映り込んだ。

リカちゃん人形だった。俯伏せに倒れた躰のねじれ具合が乱暴狼藉の痕跡を想わせた。それを見た途端、うたた寝中にみた悪夢がまざまざと甦って来る恐怖を味わった。

――姉が下校して来るより先に、リカちゃん人形を戻しておかねば！

彼女の机の上の所定の位置に、元どおりに戻しておかないとまずい事になるぞと慌ててそれを、つい今し方迄は空想上の木の橋が架かる掘割の情景が展開していた畳の上から拾い上げた。

その瞬間、直太は心臓が、どきーんッと跳び撥ねて急激に動悸が高まるとともに、顔から血の気が、さぁーッと退いて脳貧血に陥りそうな軽い眩暈に襲われた。お人形さんの首が、その華奢な造りのお人形の躰でもとくに脆弱そうな頸のところが、あのチャンバラごっこ用のビニール製の刀が鍔元から壊れかけてきた時のふにゃふにゃした感触を、直太の手に伝えて来た。そうなると刀はもう長くはもたず、

――ぷらぁーんぷらん。

こうなるともうおしまいなのだった。リカちゃんの場合は未だそこ迄には至っていないとおもいたかったが、半ば夢心地の遊びの中で演じられた劇を憶い出してみると、堕天使の直蔵からとびぐち丸で後ろ頭を、

――ばひんッ。

と強打された衝撃で突んのめって、

――どぅぐわぁ～す。

前に投げ出されるように俯伏せに倒れ込んだ姿が、眼間に

生々しく甦ってきた。いちおう直太なりに手加減はしたつもりでも、遊びに夢中になるとつい力が入ってしまう。いま目の前にある、この子供の手には持ち重りがするとびぐちの頭を、その鋼鉄の塊を、ぱかんッ、とぶつけた際の破壊力はけっして馬鹿にならなかったろう。リカちゃんの材質にいくら柔軟性があるとはいえ、首の付け根のところから千切れかけているかもしれないくらいの事は、想像したくもないがじゅうぶん想像し得るのだった。早くも半ベソ掻きながら、

「わあッ、どげん為ゅうか？　ねえ、じいちゃん、直太どげんしたら良かろかね？　ねえ、じいちゃんって……！」

じいちゃん子だった直太の耳元で、今は亡き祖父文蔵が囁く。「ほーら、いわん事っちゃなかろが。だけんじいちゃんが手加減ば為ぇろち、あがしこいうたとに（あんなにもいったのに）！　力ば加減して大事に扱わんなら、そン美奈子のお人形しゃんでん何でん壊るっくさ……」

今のでいっそう戦慄が強まった。もうリカちゃんに触れていることすら恐ろしく、

――いつまっでんこげんなしとられん（いつ迄もこうしてはいられぬ）！

とりあえず姉の勉強机の上の、元の置き場所に戻しておいて、逃げるようにそこを離れた。あとは、下校して来た姉が異変に気づかぬよう祈るのみだった――。

だが直太の祈りもむなしく、姉は下校して来るとすぐその異変に気づいた。

美奈子はリカちゃんに、朝の登校前には「行って来ます」、夕方下校して来たら「ただいま」と挨拶し、傍に誰も居ないときを見計らって、「今日ねえ、学校でこげな事のあったとよ……」と問わず語りにお喋りする。今朝も、「じゃあ行ってくるけん、よい子でお留守番しとってね――」そう話しかけながら、その栗色の頭髪を丁寧に櫛で梳いてやってから、登校したのだった。

ところが下校して来てみると、リカちゃんのたたずまいが今朝とはどこか違っていた。いつもは勉強机の前の本棚の下にお行儀よく腰掛けているのに、その日は何だか姿勢が悪く、何より見逃せないのは頭髪の乱れ様、そのケバ立ち方だった。

――直太やん、あたしが居らん間に要らん事すっとは、直太しかおらん！

自分の留守中に弟の直太が勝手に扱ったのだとおもうと、それだけで怒りがこみ上げた。問い詰めて絶対懲らしめてやろうとおもいながら、襟足を掻き上げて首根っこの後ろを触診しはじめた途端、

――えッ？

美奈子はあまりの光景に我が目を疑い、言葉を呑んだ。リカちゃんの首が、その大半が栗色の豊かな頭髪に覆われた、なんとも可愛らしい顔をした首が、胴体を離れて机の天板の上に、ぽてッ、と落ちた――。それを見た瞬間、美奈子は絶句したが、無言から一転、

「ぎゃあ～ッ！」
あたかも彼女自身が暴漢に斬りつけられでもしたかのような悲鳴が迸った。「あたしのリカちゃんが……、あアあア、あたしのリカちゃんがァ……！」その衝撃的光景を目の当たりにした美奈子は、頸のところで上下二分されたリカちゃんを持って、廊下の床を踏み鳴らす足音も荒く、直太の居る三畳間へと入って来ると、涙を流す般若のような形相で、
「直太ァ、あたしのリカちゃんば壊したろぉがア！……」両断されたリカちゃんを突きつけ、「こんバカ直太のアホ直太、どうせおまえが壊したとやろがア～！」
直太は、激情を撲きつけて来る姉に圧倒され、屁っ放り腰になりながらも、
「うんにゃ、俺ィは壊そうで為っつもりてろんな無かった。他ンおもちゃン中ぇ混じぇくっていっしょに遊びょったら……」ひとりでに自然と勝手に壊れたのだから、最初から壊れやすく出来ていたのだろうと弁解したが、
「デタラメばいうな！　人が大事にしとる物ば、おまえが勝手に弄繰り廻して打ッ壊したとやろが！　そげん、ひとりでに勝手に自然と壊るっわけ、無かやっか！　あたしのリカちゃんば、東京で公美子おばちゃんから買うて貰うたけん、大事に大事にしとったとば、壊してから！　返せ、サア元どおりにして返せ！……」
直太は姉の舌鋒と剣幕に恐れをなし、ずるずると後退して濡れ縁まで追い詰められた。だが姉は追及の手を緩めず、むしろ際限も無く湧き上がって来る怒りに衝き動かされ、
「こン馬鹿の阿呆のノータリンの低能児が、要らん事ばっかりしてから！　おまえンごたっ弟やら要らんじゃった、居らんがマシ！　おまえやら生まれて来んと良かったとにィ！」
口では足りず、次は手が出た。
――ぴしゃんッ。
音立てて鳴った瞬間、左の頬骨の辺りに痛みより熱感を伴った痺れを感じた。だが姉の怒りは未だその程度じゃ到底鎮まらず、体格と膂力でまさる彼女は直太のTシャツの胸倉を掴むと激情に駆られるまま前後に揺さぶって、最後は突きとばした。直太は、
「わあッ――！」
ひっくり返って転げ落ちた濡れ縁の下には、幸い沓脱石などは無く、祖母久代が仏壇と神棚用の供花を育てている小ぢんまりした畑で、直太は丸々とした躰でその上に軟着陸を果たした。おかげで半ズボンの尻とTシャツの背中が多少汚れたが怪我も無く、すぐ起き上がると、縁側に仁王立ちして睨みつけて来る姉を尻目にスタコラ裸足で逃げだした。鍛冶屋町の小さな通りへと出て行きしな、
「うおッ、うおッ、うおッ……！」姉が悲憤のこみ上げるまま慟哭する、とても十歳に満たぬ少女が泣いているようには聞こえぬ薄気味の悪い声が、直太の後から追いすがって来た。その野太く動物的な響きが耳について怖かった。直太が逃げて行く先は、南に四軒先のお稲荷さんより他になかった。

赤い木の鳥居をくぐって二つ並んだぶらんこの片方に腰を掛け、前後に躰を揺らして漕ぐのも忘れたままぼんやり途方に暮れていると、今は亡き祖父文蔵が、

「ほぉら、みてみん、直太。何でんオマエ、ちかっぺ（力一杯）、かんめなし（構え無し。思慮分別の無いこと）為うが。だけん、美奈子の人形さんば壊して腹掻かせたろが（怒らせたじゃないか）」姿が見えなくても傍にいることは、煙草のヤニとポマードの香料が交じる匂いと、それに生者の時とは違う幽けき気配とで、なんとなくわかる。「じいちゃんなおまえば今日も、ハラハラしながら見よったとぞ。途中で『直太、力ば加減しぇろ。まあちぃったぁ（もうすこしは）手加減して、ふわらぁ～と扱わやこてェ（そうっと扱わなくちゃ）！』ちゅうたとばってん、聞こえんじゃったかね？」

直太が憮然とした様子で答える。「直太ねえ、遊びのおもしろうして堪らんごつなると、遊ぶ事っだけであとは何ぁ～んもわからんごつなるもん」

「そら困ったねぇ～。ばってん直太、ちかっぺ為っこつばかりが能じゃなかぞ。要らん力ば入れ過ぎらんごつ加減して程良う為ぇな、何でん駄目になる。何でん力一杯すっとは、そら下手クソの為っ事っちゃけんしっぺえ為っくさん（失敗するとも）。のもぉ、あなっつぁん、わかりより召すかんも（おわかりになりますか）？」すこしからかうような口調でいう文蔵。

「遊びのおもしろして堪らんごつなっと、もう何もわからんごつなっとやけん、そげな加減てろんな出来んッ！」直太がこの調子だから、文蔵との対話はどこ迄行っても結局交わらず、平行線を辿るばかり。「直太、カゲンカゲンてろんな、いっちょん好かん！　ばってん、じいちゃんなカゲンカゲンちばっかしいうてから……！　そげん、カゲンカゲンばっかしいうじいちゃんやら、好かぁ～ん――」祖父バカの孫煩悩といわれた文蔵が生前に甘やかせるだけ甘やかしたものだから、相手が文蔵だと遠慮も気遣いもあったもんじゃない。

だが急に、心に暗い影が差したとみえて、

「ねえ、じいちゃん、俺ィがちんぽ腫れんやろうか？」

「さあ、どげんかねえ……」

直太の気懸かりの元は、祖母久代の口癖だった。

「物ば粗末に為ょっと神罰の当たる――」

では、例の「じっけん」でおもちゃを弄繰り壊すのも神罰が当たるのではないか？　直太が、神罰が当たると聞くとすぐ条件反射で小さな股間の一物が、むずッ、と痒くなる気がするのも、辰ちゃんこと井口辰也という友達が街中の掘割に放尿したら、その翌朝さっそく彼の一物がぷっくり腫れ上がった話を聞いたからだ。拝み屋の婆しゃんと呼ばれる土着の呪術者に頼んで加持祈祷してもらうと、それは水神様の神罰が当たったのだと判明し、お供え物をして赦しを乞うとすっかり治ったそうな。以後、直太の脳裡に刷り込まれたのは、

――神罰の当たっとちんぽの腫るっぱい！

そこへ、直太が「じっけん」も兼ねた独り遊びに興じる様をみた久代が、その熱中ぶりに尋常ならざるものを感じたらしく、「拝み屋の婆しゃんに拝んでもらわやんごたる、おろ善かつにどん取ッ憑かれとりゃせんと良かが……」

呪術者による加持祈祷を必要とするような、善からぬ物の怪にでも取り憑かれていなければいいが……。時々そんなふうにいって、老婆心から大げさに深刻めかして脅かすので、不安になってつい己の股間を手探りしてみるのだ。

そうした事情もあって直太は、リカちゃん人形を壊したことに関しても、

――俺ィがちんぽの腫れ上がらんと良かばってん……。

よく物を壊す直太は一見豪快なようで実は、「直蔵」とは違ってけっこう気が小っちゃいのだった。

姉美奈子の怒りも今度ばかりは非常に激しく、大人たちを判事役とする家族裁判が開廷されるに至った。もちろん、日常生活のほとんどが阿吽の呼吸で営まれているような郷原家において、異例の事だった。しかし開廷前から被告の直太の有罪は明白で、直太の罪状に合わせてどんな罰に処するかだけが、審議の焦点となった。その席で、原告の姉は被告の直太に対して、直太がリカちゃん人形を壊した代償を差し出すよう要求した。「あんたのあれ……、学校帰りに拾うて来たつぁ、とびぐちちゅうとやったっけ？　あればやらんね！　そしたら（ほんとうは気が済まぬが）赦してやったい――」

「厭ぁ～ばい！」直太は言下に拒絶しようとした。あのとびぐちの頭こそは直太が理想とする究極的に壊れぬ玩具であって、他では代替不可能な宝物だったのだから。「他ンとならやったっちゃ良かばってん、ありぃだけは、じぇったい厭やん、やりとうなかッ！――」

だが、それでは美奈子の気が済むわけが無かった。美奈子にとって直太に壊されたリカちゃんは、彼女くらいの年頃の女の子にとって憧れのお人形さんで、しかも祖母久代と最初に上京した折に東京の公美子叔母から銀座か日本橋のデパートで買って貰った、殊の外愛着のある想い出の品だったのだ。そんな大切な宝物を無残にも壊されたのだから、

――直太だってそれと釣り合うだけの代償を差し出して当然だ！

それが美奈子の、じゅうぶんに真っ当な言い分なのだった。

「あんたねぇ……、直太が口先だけでなんぼ謝ったっちゃ、ねえちゃんな赦す気にやらならん！　だって、ねえちゃんがどげん悔やしか、厭な気持ちば味おうたか……、今でんどげん恨めしか気持ちでおるか……、あんた、いっちょんわかっとらんめえが！　だけん、あんたもあんたの宝物ば、あンとびぐちの頭ばねえちゃんに取らるっと、ねえちゃんの気持ちがやっとわかるとたい――」

姉がいうと、おとなたちはみんな姉を支持した。母節子が、「ほぉら、おねえちゃんのいうとおりたい。美ぃちゃんの悲しか気持ちば、直太、わかろうちする気のあっとね、あんた

は？　その気持ちのあるとなら、あンとびぐちの頭ば持って来て、今ここで美ぃちゃんに渡しなさい！」といえば、節子とはもともと相性が悪いのか、どうも折り合いの良くない祖母久代までが、この件に関しては同意見で、「直ちゃんて、あんたがおねえちゃんのリカちゃんばわざわざ扱うて壊すとが出来んとでしょうが。それに、ばあちゃんなあんたがあンとびぐちの頭ば拾うて来ておもちゃにしだした時から、なんか為出かさにゃ良かばってんち、そげんおもいよった。直ちゃんがごたる子供のあげなつば持っとったって、どげん為んね！」

「……！」身も蓋も無いそもそも論が飛び出し、もはや反論の余地も無い、直太。

後を引き取るように父誠人が、

「コラ直太、やっちもうたもんな為様ン無かろうが！　おまえがねえちゃんとば壊したとが悪かとやけん、男らしゅう潔うせんか！　早よ、あンとびぐちの頭ば持って来い――」

かくなるうえはもう、万事休す。直太は姉の意趣返しを恐れて自分の勉強机の抽斗のいちばん奥に隠していた、虎の子のとびぐちの頭を、大人たちが見まもる中とうとう姉に引き渡さざるを得なくなった。姉は手でその重みを測るような仕草をしながら、泣いている直太を見下すような目でみて、

「ふんッ、これですこしゃあたしン気持ちのわかったろうたい！」といった。

直太が泣きながら、

「俺ィがそりぃば、そンとびぐちの頭ば、どげん為っと？」と尋ねた。

すると、姉は憎たらしい事に、

「これもう、あたしンとやけん、どげん為ょうがあんたに関係無かろうもん！　あたしの勝手たい！――」

ぴしゃんッ、と目の前で戸を閉め切るような、木で鼻を括った返事をした。

それ以降、直太はもう永遠にその珍宝とびぐちの頭を手にすることはおろか、目にすることすら無かった。

後日、直太がそのとびぐちの頭のすでにもう家には無いことを知ったのは、その年の霜月、季節は晩秋にさしかかった頃の事だった。

同じ年の初夏時分には、祖母久代が今度は一人で上京を果たし、東京に住む四女――美奈子にリカちゃん人形を買ってくれた叔母公美子――の家庭に身を寄せていた。そして約半年ぶりに、その四女夫婦と二人の孫娘たちに伴われて帰って来た。文蔵の三回忌法要のための一時的な帰郷だった。

その時には、郷原家の家族が一人増えていた。九月に生まれた赤ん坊は剛郎（たけお）と名づけられた。兄となった直太によく似て丸々と太った男の児で、直太はそんな弟が可愛くてたまらなかった。

その他にも、訪ねて（帰郷して）来た側にも迎える側にも積もる話は山ほどあるようだった。中でも両家の子供たちの

事は度々話題にのぼった。
　直太に関していうなら、生前の文蔵が祖父バカの孫煩悩で大甘なのをよい事に、ねだり倒して買って貰ったふつうのおもちゃなんか、飽きたら壊し、どうせまた飽きたら壊してしまう。そのくせ古銭の寛永通宝とか、柄を折れ欠いた古いとびぐちの頭とかいった妙な物を、ときどき拾って来ては珍重し、それらの珍品をまるで宝物扱いするというので、
「末は博士か大臣か、ならぬ、骨董屋か古道具屋か……」誠人がいえば、
「考古学者か歴史学者か、でしょう」
　誠人とは違ってふだん酒も飲まず、すこし飲んだら真っ赤になるが気性は篤実温厚、新宿で特許事務所を構える弁理士の叔父が、直太を弁護するように持ち上げた。
　コーコ学者だのレキシ学者だのと、直太には何を研究する人か皆目見当もつかぬなりに、誠人の口から「とびぐちの頭」が飛び出したのは聞き逃さず、
「えッ、とびぐちの頭てェ？　俺ィがとびぐちの頭、ねえ、とびぐちの頭、どげんなったとォ？　ねえ、どげんなったとね、てェ……？」
　直太は、あの日それを姉の手に引き渡して以来初めて、そのとびぐちの頭の消息を知るところとなった。それはすでに郷原家には無く、祖母の上京前には彼女の手を経て屑鉄屋に引き取られて行ったのだそうな。
「あ～ッ、なんで持って行かすっとよォ？　要らんとなら俺ィに返してくるっと良かったとにぃ～ッ！」聞けば聞くほど惜しまれてならなかった。拾って来た当初は、折れ残った柄の残骸がトゲトゲして手に刺さりそうだったから、幾日もかけて沓脱石に打ちつけたり擦りつけたりして根気よく、人生で初めての努力というものをして加工した、あの記憶が甦って来た。それにつけても、
――屑鉄屋にやるやら、あア勿体なさァ（勿体ないことだ）！　俺ィがせっかく宝物にして遊びょったつに……。あれの良さがわからんやら、バカばい、アホばい、アンポンタンの川流れがぁ～ッ！
　直太は泣き顔を東京の叔母一家の人たちに見られるのが厭さに、逃げ込むように彼のおもちゃ箱がある部屋に駆け込むと、自分の家族の情けなさ、彼らへの恨めしさがいっそう募ってきて、声押しころしてシクシクと泣いた。そのすすり泣きする声を、彼に壊されたおもちゃたちが、おもちゃ箱の中で聞くともなく聞いているようだった。やがてその泣き声も、いつしか寝息へと変わっていた――。

（了）